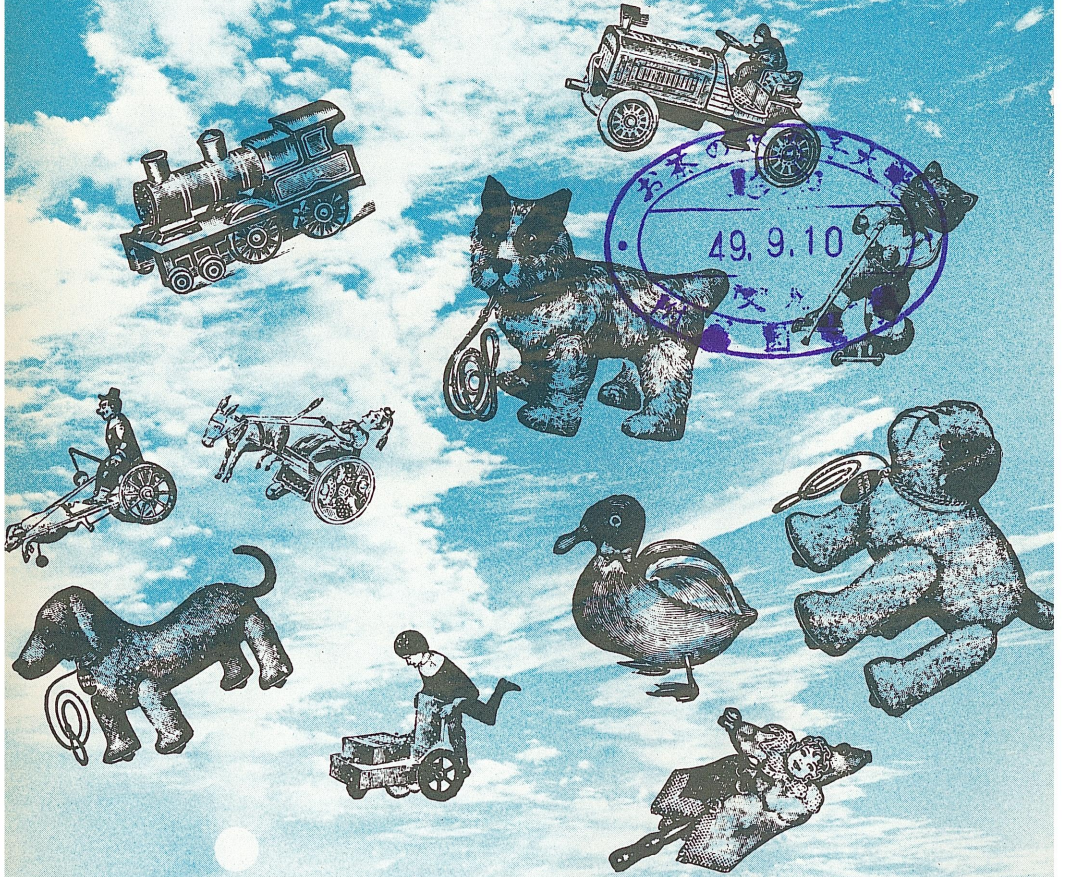


家庭・保育所・幼稚園

# 幼児の教育



9

第七十三卷

第九号

日本幼稚園協会



# より豊かな幼児教育を

新刊書

## 子どもにとって 園生活とはなにか

佐治守夫・大場幸夫編著

問題行動をめぐる愛情あるユニークな事例研究の書

B5判・192頁・1,200円

## 保育ニードの地域性

保育学年報1974年版

日本保育学会編

B5判・246頁・3,300円

保育および保育学に関するその年度の動きをもれなく収録。  
学会における研究発表・遊具・絵本などの幼児文化財・保育  
関係図書目録・保育行政の動きなど価値ある資料を満載。

1962年版 147頁 600円

1969年版 328頁 3,500円

1963年版 316頁 1,200円

1970年版 284頁 4,500円

1964年版 280頁 1,800円

1965年版 230頁 1,700円

1971・1972年版 248頁 2,000円 (絶版)

1966年版 245頁 2,200円

これからの保育内容

1967年版 256頁 2,300円 (絶版)

1973年版 252頁 2,800円

1968年版 310頁 3,000円 (絶版)

園保育と家庭

## 日本幼児保育史 (全6巻)

日本保育学会著

日本保育学会の共同研究。全国的に貴重な資料を集録。日本で初めて大成された書です。

第1巻 江戸時代～明治前期 256頁 1,200円

第4巻 昭和前期 336頁 1,400円

第2巻 明治後期 304頁 1,000円

第5巻 昭和18年～昭和20年

第3巻 大正期 350頁 1,500円

312頁 2,800円

第6巻 終戦直後期～昭和23年(近刊)

新刊

## 幼稚園参考書—その教育と運営—

B5判 440頁

東京都私立幼稚園協会編纂

日本私立幼稚園連合会刊行

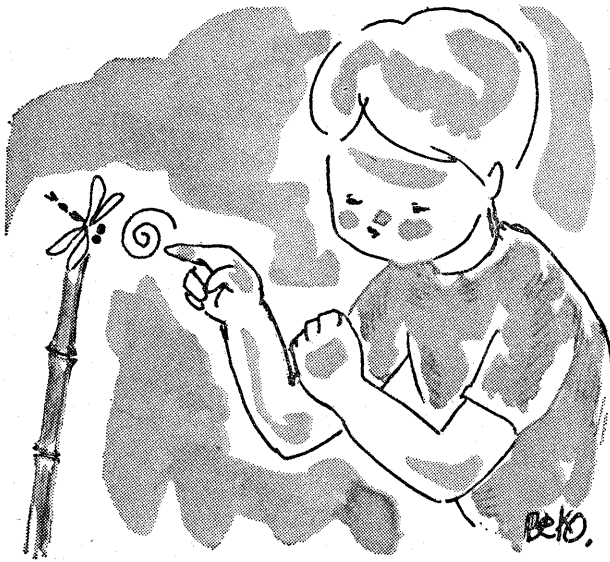
幼稚園教育と運営に関する指導書です

くわしくは、フレール館代理店・支社・支店・営業所、または本社営業課(03)292-7781(代)にお問い合わせください。

フレール館

# 幼児の教育

第七十三卷 第九号





幼児の教育 目次

第七十三卷 九月号

表紙 司 修  
カット 中島英子

偉大な科学者の提言……………堀内康人(4)

子どもと生活空間……………古沢頼雄(8)

私の幼児教育論 I “幼児とともに”……………神沢良輔(12)

子どもの世界……………村石京子(16)

インディアンの踊り……………赤羽美代子(19)

私の保育……………堤 真紀子(23)





「白い木馬」より……………ブッシュ・孝子…(30)

★対談 ブッシュ・孝子さんを偲ぶ……………周郷博…(32)

服部和子

日々を感じることに、思うこと……………田中都慈子…(40)

洋書紹介……………江波諄子…(43)

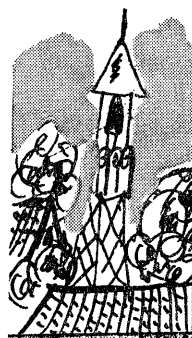
小鳥に寄せて……………光木美子…(48)

橋詰良一著

「家なき幼稚園の主張と実際」より(七)……………(51)

わらべうたの一考察……………小林つや江…(56)

## 偉大な科学者の提言



堀内 康人

大人たちが、「暑い暑い、はやく涼しくなってくれれば」などと愚痴をこぼしていますが、幼児たちはどうでしょう。大人が愚痴をこぼしている間に、汗をふこうともしないで動きまわり、なにかをしています。幼児たちは遊びながら、これから生きて行くために必要なあらゆる学習を喜んでしているというわけです。その幼児が幼稚園や保育所の生活を終えて学校へあがると、だんだん勉強がきらいになり、しまいには、「また勉強か、いやになっちゃうよ」というようになります。私どもの子どものころを思い出してみても、苦労していやいやながら学習したことがなんとたくさんあったことでしょう。そのつづきで、幼児教育にたずさわる人たちも、いまだに幼児教育について考え、学ぶことにわきたつような喜びを感じている人が少ないというわけです。その証拠に、

圧倒的多数の人々がわずか三、四年の経験で幼児教育の現場から消えて行きます。こうした状況ですから、幼児教育の積み重ねができないで、どこへいっても機械主義的な教育が繰返されている現状が目につきまます。大学では学生時代に心理測定などの技術を教えられても、モンテッソーリがいつているように、それが役に立つかどうかはなほだ疑わしいもので、機械装置のような教師ができてしまっている、といっておりますが、私もそんな気がします。幼児教育の科学化が巷に叫ばれているのですが、幼児教育の現場はどうでしょう。幼児教育の科学化のためには、幼児教育者が科学者にならねばなりません。モンテッソーリはこんなこともいっています。

「ところでわたしらは次のような人を科学者というのです。そ



の人は人生の深い真実をきわめる方法を見だし、その真実の魅力ある秘密をおおうベールを持ち上げ、そのさい自然に対して自分を忘れるほど情熱的な愛を自分の奥底に感ずる人です。科学者は実験機械を取り扱える人ではなく自然を知っている人です。この崇高な愛好者は僧侶のようにその情熱が外に現われず。また外界からは何も聞かないで、その実験室（幼稚園・保育所として）もよいでしょう。で暮し、また研究にふけるので自分のことは忘れ、時々変わった行動をしたり、自分の服装はかまわないような人です。……それゆえ科学者の精神は、科学者の機械主義より上に存在します。科学者は、精神が機械主義に打ち勝ったとき、彼の登り道の頂点に達します。科学者は自然を研究して新しい知識を得るだけでなく、それを哲学的に総合することもしなければなりません」といっています。

人間社会における、子どもという自然であると同時に文化的存在を研究する幼児教育者、保育者の姿のあるべき方向を見事にい表わしているような気がします。

私も保育者が科学者だ、まあなんとという現状認識の浅いことをいうんでしょう。今の世の中でこんなことが通用すると思っているのでしょうか、現場の保育者はたくさんの子どもたちをどの

を考えるなどという余裕など爪の垢ほどもありやしない、ある学者がそんなことをいったと学者先生がおっしゃる、それだから唐人の寝言だというのだ、という気持ちもよくわかるのですが、それをあえていっているのです。

そこで私は、そんなふうにお考えの方にわかっていただくために、次のようなことを申したいと思います。保育者の中にも学者の中にも間違った偏見が色濃く残存しているということです。それはなにかといえますと、肉体労働と精神労働とに対する偏見であります。依然として私たちの中には肉体労働は精神労働よりいやしいものだという偏見です。研究室や実験室で大学の先生がやっていることは高度な精神労働で、教育の現場での仕事はどちらかといえは肉体労働だという考えです。私はこうした考え方が少しでもあることに反対します。

それに関係したことで次のようなお話をしてみたいと思います。

一九三五年、レニングラードとモスクワで第十五回国際生理学会が開かれ、その時の大会の組織委員長をしたのが有名な生理学者イ・ペ・バブロフでした。彼がその翌年、全ドイツ炭坑職長会議へ、メッセージを送りましたが、それは実に格調の高いもので

かったので、メッセージを送ったのです。そのメッセージは次のようなものでした。「尊敬する炭坑夫のみなさん。わたくしは一生を通じて知的労働と肉体労働とを、ともに愛してきましたし、またいまも愛しております。そしてどちらかといえば後者の方を余計にこのんでさえおりました。肉体労働の中になにかよい思いつきをもちこんだとき、いいかえれば頭と手を結合させたときには、とくに満足を感じたものです。みなさんがたはこの道に入られました。将来もみなさん方が、この人類の幸福を保証する唯一の道を進まれるよう心から望む次第です」と。

教育学者や心理学者が実験室や研究室からどんなことをおっしゃろうと、子どもを保育する現場の教師や保育が具体的に体を動かす、子どもの遊びのなかにとびこんで、子どもたちと一緒に生活しなければ教育的事実はないのです。パプロフは同じころ若い科学者にこう呼びかけています。

「鳥の翼がどんなに完全であるとしても、空気がなしでは鳥を飛びあがらせることはできません。事実——それは科学にとって空気があります。それなしでは諸君は決して飛びあがることはできません。それなしでは諸君の理論は、むなしい羽ばたきにおわってしまいます。しかし研究し実験し、観察しているときには、いつも事実の表面にとどまらないよう努力することです。事実の記

録係になりおわってはいけません。それらをひきおこす秘密の中につらぬきいるようになさい。それらを支配している法則をねばり強く探求しなさい」と。

さきのモンテッソーリの言葉とともに実にすばらしい、偉大な科学者でなければいえない言葉だと思えます。

日本ではまだ現場の教師が教育を科学でできるような環境になっていませんし、そんな日がいつやって来るか心もとないかぎりですが、できることからやっていく以外に道がありません。保育のカリキュラムを機械的にたてて、無事一日の保育を終え、翌朝保育日誌を書き、いろいろな行事をその中におりこんで、月日は矢の如く流れ去ります。アメリカのフィラデルフィアで脳損傷・精薄・精神遅滞・脳性麻痺・痙直性・肢麻痺・半身不随など、脳障害に悩む子どもたちの治療教育にあたって大きな成果をあげている、グレン・ドーマンは、

「私たちの研究所では、この子はよくなったと思う、という表現はすでに禁句だった。もし誰かがうっかりこれをいってしまうと、きまってこういう答が返ってきた。よくなったと思うなんていうんじゃない。君がどう思おうと思うまいと問題じゃない、あの子が以前にできなかったことで、今できるようになったことがいったいあるのかないのか」



それが大切なのだといっています。ちょっとしたことのようにですが、毎日の保育を反省する上で耳を傾けなければならぬことです。「入園の時とくらべてほんとにいい子になりました」というようなことがよくいわれますが、なにがどのようになったかが問題ですし、別に幼稚園や保育所に来ないでも、いい子にはなる点もあるし、こうしたからこうなったのだということを確認をもっていえるような保育こそが、保育の専門家・研究者そして科学者の口にすべきことだと思います。

パプロフは若い科学者に、

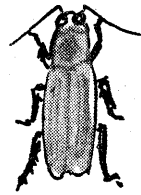
「徹底、徹底そして徹底であります。敢重に徹底ということになれてください。科学の高嶺にのぼろうとする前に、まずイロハから学ぶことです。手近な一歩をわがものとすることなしに、決してつぎへ進んではなりません。少なくとも、自分の知識の不十分さを、きわめて大胆な推測や仮説によっておしかくそうとしてはなりません。このシャボン玉が移り変わる色どりで、どんなに諸君の眼をたのしませてくれたとしても、それは必ず破裂して、混亂いがいの何物をものこさないであります。節制と忍耐になれてください。科学のなかでやりがいのある苦しい仕事をすることを学びなさい。事実を研究し、つみかさねなさい」

といっておりますが、幼児が楽しい絵を描いた、上手に歌を唱

えるようになった、集団の一員としてお互いが自覚するようになった、それだけでも大変な努力のいることですが、なにかパプロフのいうようにシャボン玉の移り変わる色どりで楽しんでいような気がします。私は今、ある保育所でアンデルセンの童話を子どもの保育の中にもち込んで、子どもたちにその醜いあひるの子の気持ちをとかわかせたいという実験保育を、目立たないがねばり強い研究者と保育者で一年がかりでやっているのに協力しながら感じたことは、教育愛とそれを実現する上での徹底した姿勢と節制、そして忍耐ということでした。その結果をいずれまじめとめ上げることには協力したいと思いますが、結果の整理はカスのようなもので、子どもたちはそれぞれ強烈な印象を生活の中で楽しんで学校へと巣立って行きました。親子二代、三代かかっても幼児教育の道はやめられないほど魅力的なものであり、またそのような先駆者がたくさんおることを知っておりますし、そのような人々の情熱に支えられて現代の幼児教育があることも知っておりますのでなおさらのこと、それをもっともっと前進させたいという願いをこめて、偉大な科学者の言葉などをひっぱりだしながら駄弁をろうしました。

(東京家政大学)

## 子どもと生活空間



古 沢 頼 雄

六月号では、「子どもと時間」という題のもとに子ども  
の生活の中で時間をかけること、時間がかかることが子ども  
も自身新しい経験を、自分でしかも自分のものとして獲得  
していくための基盤として必要であろうということを述べ  
てみましたが、今回は子ども生活とそのため空間との  
関連を、子どもの心の発達に焦点をあてながら考えていっ  
てみたいと思います。

樹木や草花が狭い場所に密集して植えられるとお互いの  
枝・葉が日影をつくり、ぶつかり合い、地中からは一本一  
本が十分な栄養を摂ることができなくなってしまうため  
に、結局はどれも力一杯に成長することができず仕舞いにな  
ってしまいます。それとちょうど同じことが動物の世界

においても言えます。生活圏の中あまりに多くが一緒に  
なっていると、身体的にも心理的にも悪影響があることは  
これまでいろいろと実証されています。たとえば、白ねず  
みに彼らの住み家としてまったく同じ大きさのかがごを二つ  
用意し、一つのかごには大きさの割に、見るからに過密で  
ある位の数のねずみを入れ、他方には一匹一匹がよく動き  
まわることできる位の数のねずみを住まわせるようにし  
てみると、前の場合の方が一匹一匹のねずみの成長がとみ  
に悪く、心理的にも不安定な行動を示し、また、死亡する  
ねずみの数も後者に比べてはるかに多いということが示さ  
れています。このことから、すぐ、ねずみ一匹当りの空  
間が広いほどよいという結論をいきなり持ち出すことはで  
きません。というのは、同じ大きさのかがごにたった一匹だけ



を住まわせてみると、そのねずみはだんだんと動作が不活発になり、心理的な障害をおこしてくるというところもいわれているからです。したがって、ねずみの場合には、中庸的な生活空間と、他との交流のあることが保障されることが生活上必要であるといえるのでしょうか。

ところで、人間の場合には、このような影響はどのようなかたちで表われていくのでしょうか。

二つの面からその影響を考えていくことができると思います。

その一つは、いままで述べて来たような生活圏そのものがそこでの、その時の人間の行動を規定していくのであります。

もう一つは、生活圏の様相そのものが、そこで出会うことに対するとらえ方を規定していくだけであって、いつのまにか個人の行動の中にくみこまれて、そこを離れてからも依然として影響をもち続けていくということです。大げさにいえば、いつとぎのことが人間一生の問題につながっていくということです。

次のような例はまたニューモアを含んだ話として私たちに伝わって来ます。

三畳にないこと下宿していた人が、ある機会に今度は十畳を借りるようになって、住みはじめたところ、さて、いままでよりずっと広い部屋をどう使うか、自分はいつどこにいたらよいかなど、なんとなく落ちつかずにまごまごしてしまったということなのです。つまり、この人の場合、毎日三畳の部屋で生活しているうちに、その部屋を用いるのに適当な習慣が、知らず知らずのうちに身につけてしまつて、心一つの「わくぐみ」ができ上がつていったがために、物理的な環境が変わっても心理的に新しい環境に適応することが当座のところできないために、とまどいとなってあらわれたということなのでしょう。このことは、いつも規制された中で生活していると規制がある中ではそれに従つて行動をおこすことができるのですが、一度規制があたえられない機会に出会うと、まったく自分からは自発的に行動をおこすことができなってしまう、というところにつながる問題が含まれているとみることができましょう。

ところで、子どもの生活空間を考えてみるときに、いままで述べて来たような物理的な問題が心理的に影響してい

くということだけではなく、生活空間が狭ければ、大人の世界と同じ空間にいわせなければならなくなり、それだけ人が子どもの世界に介入してることが多くなるという結果を生んでいくと考えられます。それは、いまの社会的通念からいって大人と子どもが共存したり、子どもの世界に道をゆずるよりはむしろ、大人の絶対性が常に優先しものごとが考えられるからだといえましょう。

たとえば、少しの物音が隣人の生活にひびくような住いの構造と空間の中で生活をしている場合には、少しばかり子どもが騒いでもすぐに隣人のことを気づかって子どもを止めて静かにさせるということがおこってしまうかもしれません。

もちろん、このような条件のもとでの生活自体を否定するつもりは筆者にはありません。もっと他ののびのびとした条件のもとで子どもの生活を送ってあげたいと思っただけでも、そのような生活をせざるをえない、その中で子どもを育てていかなければならないわが国の社会的状況を無視して、そのような行為を子どもに対してしなくてはならない大人が悪いと言いつけることはできません。筆者がここで取り上げたいのは、そのような状況の中で、大人の子

どもへの知らず知らずの介入が生じていることに大人の方が気づき、その場の解釈を子どもに原因があるというようにとらえて禁止するという、最も手近な方法を出発させるのではなく、より創造的な解釈を生み出していこうとする姿勢に立つことを積極的に考慮することです。

大人は子どもよりも生活経験が長いためか、どうしても自分のわくをもって物事を見てしまいがちです。見るだけならばまだよいとしても、それを他人におしつけてしまうということをしてしまいます。そのことが場合によっては「しつけ」とか「教育」といわれてしまっている時もあるようですが、要するに相手の気持ちや意志は無視されてしまうわけです。大人と子どもが近い距離にいて、生活を送るとどうしてもこのような大人の動きが、次々と子どもに対して向けられてしまうということです。いわゆる「見てられない」という大人の気持ちなどその端的なあらわれともいえるでしょう。その場その場だけの判断がすべてに先行してしまうのです。このことは、生活空間の広さと決して無関係ではないと考えられます。遠くから見たいられることも、近くにいると手を出したり、ことばにしたりしないといられないということは子どもにもふれるすべての場面

でいえることでしょうか。

さて、もう一つとりあげることは、子どもの生活空間の構造が大人の考え方によって一方的に規定されているということについてです。

たとえば、日本のいたるところで都市化が進んでいる中で、以前は子どもたちの格好の遊び場であったあき地は次に姿を消し、道路は、人間が歩いたり、遊んだりする道ではなくなり、クルマのために存在する通路となってしまう。ほんのついたり程度に作られる公園は、コンクリートでかためられた建築家の夢だけをかえたとような造形物で、子どもが自分たちで作り上げる遊び場という余裕はともてないものとなってしまう。

「外で遊べといわれても、危険だ！ 迷惑だ！ 立入禁止だ！ といわれて何で遊べるか」ということを表現した子どもの詩を目にしたが、確かに、私たち大人は生活の場を構成するときに、大人だけの論理によって、ことを進めてしまっている傾向が大いにあります。園庭の舗装ということは、確かに園舎を清潔に保つための条件かもしれませんが、また、園庭の管理に要する費用も一度舗装をして

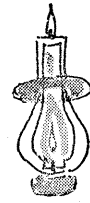
しまえば、節約できることで、あるかもしれません。しかし、そこには土自体のもっている感触も、泥こねに發展するおもしろさも、シャベルを使って掘りかえす楽しさも存在しなくなり、ただのこるのは頭を打ったり、すりむいたりする身体的危険だけです。そして、大人は子どもの身体的怪我を恐れるがために思い切り遊ぼうとする子どもを制止し、いつも、そろそろとしか遊ぶことのできない場になことをしてしまうのです。

子どもたちが、自分たちの生活を自分が行っているという実感をもてるためには、彼らが、そこを「いま」自分たちで機能できる場所と時間としてとらえることが、まず必要なのではないでしょうか。と考えると、空間的にも、時間的にも、現代生活は子どもに生活する気持ちをおこさせないように、彼らを追いやってしまっているといえましょう。大人の生活の谷間に子どもの生活が存在するのではなくて、一個の人間としての子どもの生活が確保できる、そんな状況を実現化し、子どもの側に立って発言し、指向していくことが、子どもたちの将来のためにもっと必要なのではないかと考えないではいられません。

(日本女子大学)

# 私の幼児教育論 I

## “幼児とともに”



神 沢 良 輔

### 一、はじめに

最初から私ごとになってまことに恐縮ではあるが、私の幼児遍歴も、いつのまにか、二十数年になってしまった。この間、四日市の市立教育研究所員として十一年、市立幼稚園長として十二年をすごし、今年の四月から、同じ四日市市にある暁学園短期大学に勤務することになった。

そこで、本誌の編集者から、このような機会に、“私の幼児教育論”とでもいうものを連載してはどうかというお話があり、喜んで引き受けたまではよかったのであるが、いざ書き始めてみると、どこからどう始めたらいいかということや、私の非力のために、どうにもうまくいかず、結局は、いろいろ考えあぐねたうえ、初めに、少し大げさにも思われるが、現場の実践の本質とでもいうものを、私なりにまとめてみることにした。

### 二、幼児とともに

#### —— 幼児との生活の意義 ——

私の転勤は、きわめて他動的なことからであったが、いざ、幼稚園での幼児との生活から、幼児のいない生活に入ってみると、幼児のいる生活というものについての意義を、いまさらながら強く感ずるのである。

そこで、初めに、幼児との生活の意義について見ていきたいと思うのである。

#### (i) そこに幼児がいる

幼児とともに生活しているものにとつて、そこに幼児がいるということは、きわめて当然のことであり、なんの不思議もないのであるが、なんとも表現できない幼児たちの生命力にとんだ、元

気のよいざわめき、かん高い声、ときには泣き声といったものが、生活の環境の中にないということは、とてもさびしいことである。

幼児がいつも生活の中にいるということは、実践しているときには、あまり気がつかないことではあるが、やはり幼児から離れてみると、幼児と生活していることの重大さに気づくのである。

私などは、どちらかといえば、幼児教育の実践者というよりは、部外者がそこへ入りこんできて、実践のじまを続けてきたような存在であったのであるが、それでも、そこに幼児がいなくなると、やはり、そこに幼児がいるということの尊さや意味を、あらためて感じるのである。

### (ii) 幼児とともに成長し発達する

私は前述のように、幼稚園に勤務する前にも、教育研究所にいたということから、幼稚園へは、保育者との共同研究のためになんども行く機会に恵まれたし、ある研究などでは、ほとんど一年を通して、平均して毎週一回程度行ったことがある。

そこでは、私はたしかに、幼児の一年間の発達を私なりに把握したという研究者としての喜びがあったと思うが、幼児とともに

成長してきたという喜びにはならなかった。だから、一つの研究が終ると、それをもとにして、つねに新しい研究課題の発掘を始めるなければならなかったし、問題意識ばかりが前面へ出てくるということにもなりかねなかったのである。

もちろん、私のこのような態度は、幼稚園に勤務してからでもあまり変わることはなかったし、いつも幼児教育の問題点の掘りおこしばかりしているようにも思われるが、逆にいえば、このような態度が、現場で幼児と生活している保育者としては、もの珍しくもあり、ときには珍重されるという結果にもなったように思われる。

だが、今になってよく考えてみると、やはり、研究所時代の幼児教育に対する問題の捉え方と、幼児と生活していた幼稚園時代のそれとは、本質的に大きな差異があったように思われるのである。

つまり、幼児との生活が始まってからは、幼児教育の問題を考える場合、幼児との生活そのものが、いつも生き生きとして、私のイメージを支えていてくれたからである。しかも、その幼児は、ひとりひとりの具体的な個性をもった生きている幼児であり、決して、不特定の幼児や幼児一般ではないということである。研究所時代には、それがなかったのである。それは、入園以



来、私とともにつねに変化し発達していく、ひとりひとりの幼児そのものであった。

このような実感は、やはり現場における幼児観の基本にならなくてはならないものであるうし、現場での研究の基本にならなくてはならないものであらうと考えている。

### (iii) 幼児とともに成長を喜びあう

そのことは、保育者の側からいえば、幼児とともに、その成長を喜びあえるということになる。

私はこれまで、どちらかといえば、幼児を客観的にみるということに慣らされてきたようにも思うし、このような方向に自身自身をもっていくように努力していたようにも思える。

このようなことについて、自分に対しての弁護のない方が許されるならば、これまで、私に課せられた課題は、現場の実践を理論化することであり、いろいろなこれまでの研究者の研究から実践に必要なものをうまくとり入れて、現場と研究者の間のパイプ役になっていくのが、仕事であると考えていたためでもある。しかし、私が幼稚園の現場を去らねばならぬということが、客観的事実としてしだいに明らかになってきた今年の一月からは、このような自分自身に対して、なんとなくやりきれない気持ちにな

るとともに、このような考え方に対して、きびしいさびしさをもつようになってきた。そして感情的には、いわゆるセンチメンタルになっていく自分というものに気づくようになった。それがなんであったかは、今ははっきりいうことはできないけれども、やはり、生きていて、保育者とともにつねに変化し成長し続けている、ひとりひとりの幼児への愛着であるとともに、幼児とともに生活しているという実感からであったということであらう。

また、私が客観的方向で幼児を見ることができたのも、やはり今になって思えば、いつもともに生活している幼児たちがいるということが、その支えになっていて、そのことに甘えていたのではないかと思うのである。

だから、そのような幼児たちのいない客観とは、いったい何であるかということ、これから私も、幼児教育の研究の中で、もう一度考えなおしてみたいと思うのである。

いずれにしても、目の前にいるひとりひとりの幼児とともに、その成長を喜びあい、その中で泣いたり笑ったりできる現場の保育者は幸福であり、本気になって実践にとりくんでいるという実感は、やはり、幼児教育のもっとも基本であり、現場の保育者でなければ味わえないものであると、つくづく思うのである。私も、やはり、ぜひいつかはもう一度、幼児とともにいる生活をし

てみたいと思っている。そのためにも、一時、幼児から離れることは、ある意味ではよいことかもしれないと考えて、今は自身身をなぐさめることにしている。

#### (iv) 幼児から学ぶ

このような実感は、幼児から学ぶという、現場の実践をともなうてあらわれてくる。幼児は、自分の感情を受け入れてくれる信頼できる大人にしか、自分の内面の世界を見せてくれない。それも、外部からの一回や二回の接触ぐらいでうまくやろうなどというのは、きわめて無理な相談であり、一時的にはなにか成功しているように見えても、結局は幼児の外面的な行動を見るといふことになってしまう場合が多い。

私なんか、ときどき担任の保育者が休んだときなどに、その学級の幼児たちを対象にして、一緒に遊ぶということがあったが、幼児たちとうまく遊べたという実感をもったことは、自慢にはならないが一度もない。おそらくこのようなことは、今後ともないであろう。

これは、私の保育があまりにも未熟すぎるということに由来しているが、しかし、担任の保育者がいるときに、幼児たちの中に入って遊ぶと、案外に、幼児たちは私を受け入れてくれて、うま

くいくことが多いのである。このようなことを考えてみると、担任というものが、幼児に対していかに大きな影響をもっているかということに気づくとともに、幼児を外からいくら客観的に見たとしても、そこには、ほんとうの幼児は存在していないということになる場合が多いのではなからうか。少なくとも、幼児から学ぶということとは、現場の保育でなければ、きわめてできにくいことであるし、幼児から学んだということは、みかけはいかにさ細なことにみえるようなことでも、そのことはきわめて尊いことなのである。また、そのためには、現場の保育者がいかに大きな役割を果たしているかということを感じするわけだし、そこにも現場のもっている、現場のよさというものが、うかがわれるのである。

いうまでもなく、私は、学問的な計画された客観的な研究を否定しているわけではない。ここでは、幼児から学ぼうとする保育者こそ、幼児の内面の世界に入っていくことができるし、その中で、幼児を理解できるという特権を発揮してもらいたいということとを強調したかったからである。

(暁学園短期大学)

## 子どもの世界



村石京子

三月に、二年間あるいは三年間いっ

くしんだ子どもたちを小学校へ送り出し、四月、新しい三歳児を迎えました。五歳児の三学期に、仲間同士で語り合い、あそびを計画し、行動する子どもたちと過ごして来て、それを当然のように受けとめていた私には、三歳児という年齢を頭の中ではよく考えていたつもりでしたのに、実際に手元を迎えた三歳児のその幼さ、たどたどしさ、そして愛らしさは予想を越えた感

がありました。

当初は、自分の身のまわりのこと一つにしても、靴も満足にはけなかったり、手洗いに行ってもお人形のようにただ立ったままでいる姿に、三歳児とはこんなだったのかと今さらながらとまどう毎日でした。それでも一ヵ月経ち二ヵ月経つと、けんかをしたり泣いたりしながらも毎日一緒にいる子どもたちの間には、淡い連帯感、仲間意識が生れてくるようです。最初は「あの

子がね」とか「お友だちは」などといっていたのに、いつの間にかお互いに名前を覚えて呼びあったり、姿の見えない子どものことは「○○ちゃんは今日はお休みなの？」と気にして聞いたりするようになりました。友だち同士だけで遊べる人たちも少しずつ出て来ました。そんな姿を見ていると、これが幼稚園に毎日通っていることよって生み出した子どもたちの世界、子どもたちの社会なのだとしみじみ思うのです。はじめはばらばらだった個々がより集まって一つの集団を形づくっていく過程をつぶさに感じさせられるこのころです。

次に、時が経つと忘れてしまう三歳児の姿、小さな心の動きを幾つかとりあげてみながら、三歳児の世界をかい間見てみたいと思います。

## 。はじめての共通の話題と協議

明日はいよいようれしい遠足です。

この間から、あと三つねると遠足、あと二つで遠足と指折り数えて待っていました。話題もそのことが多くきかれます。「私、遠足のハンド、ブック、買ったの、赤いのよ」とI子がいうと、「私もあるもの」とT子がすぐ応じられるのは、以心伝心でリュックサックのこととすぐ通じてしまうからでしょう。

でも今日はいくの雨降り、明日の遠足は無事行けるかどうか大人も子どもともとても気になります。窓の外を眺めては、「雨降ってるね」といいながら何人か一緒に雨足をじっと見たりしていました。帰る前に、「明日お天気がなったらみんなで遠足に行きましようね」というと、みんなうなずいていましたが、M夫が「雨降っても行こ

うよ、傘さして行けばいいよ」と突然言い出しました。「そうしようか、傘さして行こうか、私も傘あるもの」と口々に言います。そして真面目な顔で「先生は傘ないの?」「私入れてあげる」というのです。

いつもはなかなか話を聞かなかったり、勝手なおしゃべりに忙しい子どもたちが、Mちゃんの提案により衆議一決、こちらが異論をさしはさむ余地のないほどあざやかに意見がまとまりました。小さな胸を痛めていた雨の中を、しっかりと傘をさして帰宅の途につきました。

内心困っているのは私だけ……。でも翌日は心天に通ずで、暑いほどの好天に恵まれ、級協議による雨天決行はありませんでしたが、三歳児でも、級全体で一つのことを考え、話し合うことも場合によってはできるのでね。

次は三歳児ならではのエピソードを幾つかご紹介してみましよう。

## 。大切なバンドエイド

Aちゃんが庭を走っていてころびました。園庭には砂利が敷いてあるので、ひざ小僧をつけて二、三カ所ちょっと血がにじんんでいます。自分のひざをしげしげと見て「Aちゃんの足、あなあいちゃったよ」——私はあなのあいた足を消毒してバンドエイドをはってあげました。

二、三日してA夫の母から「この間、幼稚園ではっていただいたバンドエイドが大切で、家ではどうしてもはりかえさせません」と笑いながら報告がありました。

## 。うさぎの赤ちゃん

幼稚園で飼っているうさぎが赤ちゃん

んを五匹ばかり産みました。生れたばかりのうさぎは大人の指位で、あのふわふわの白い毛なんかちつともなくて赤くてぐにやぐにやしています。

「あれがうさぎの赤ちゃんよ」と説明されて、子どもたちは不思議そうに見つめていました。

何日かしてK君のお姉さん(小学生)が帰りの時間に迎えにやってきました。そして、「うさぎの赤ちゃんを見せて下さい」と小声で頼むのです。それからお母さんの説明がありました。

「この間から毎日のように、K男が、ぼくの幼稚園には赤くて小さなうさぎの赤ちゃんがいるんだよ。お姉ちゃんなんか赤いうさぎ見たことないだろうと自慢するもので、今日はとうとうたまたまなくなつてついでに来ました」と。

私はK君とお姉さんをうさぎ小屋に

連れて行き、姉弟で一先懸命鬼の赤ちゃんを眺めているようすを見ていました。お姉さんは赤いうさぎの正体に納得がいき、彼も満足したらしいようすでした。

### 。鬼さんのコイビト

初めて鬼ごっこをした日のことです。大勢でジャンケンをしてもなかなか鬼がきまりません。結局鬼は先生ということになって追いかけっこが始まりました。遊び方の基本的なルールがわかる子どももいるし、よくわからない子どももいるはずなのに、ふん囲気でみんなはワッと走って逃げて行きました。「つかまえた」「つかまえた」と何人つかまえてもいつまでも鬼は先生ばかりで、子どもたちはどんどん逃げたしまい、それが楽しく嬉々として走

りまわっています。

こんな形の鬼ごっこをししばらく続けているうち、逃げて走っていたS夫がつともどって来て私と手をつなぐようになりました。この子は友だちと遊ぶよりもまだ私のそばにいたいことが多いので、友だちの方へ行かせようと思つて、「Sちゃん、先生は鬼ですよ。みんなのいる方に行かないとつかまえてやうわよ」と言いました。

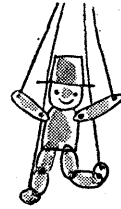
するとS男はすました顔で、「ぼく、鬼さんのコイビトになるの、だから手つないでいいでしょ」というのです。そして「ぼく、先生と仲よしだものネ」と念をおすのです。私はS夫と手をつなぎながら鬼ごっこを続けました。

「三歳児」って本当に可愛らしいと思うこのごろです。

(お茶の水幼稚園)



## インデイアンの踊り



赤羽 美代子

### 一、秋が幼児を誘っている

夏の日盛りの中をかけまわり、また、日かげにすっぽりと包まれて、安らぎをおぼえた子どもたちに、秋の日が静かに近づいている。

八月末ごろに、ときどき吹くひんやりとした涼風に、幼児は、ふと幼稚園・保育園のなつかしい友の顔、園舎の積木、お庭の砂場、すべり台を思い出し、思わず「おかあさん、幼稚園は、まだ始まらないの?」と、二期期の開始を待ちこがれ、ぐんぐんと活気をあおり立てられている。

「反対に、こまやかな家族の愛情にひたって、そこから、ちょっと抜けがなくなっている子どもたち。「おかあさん、幼稚園、もう始まっちゃうの?」と心細く、早くも、一すじの涙がこぼれる甘えん坊。

二期期開始と同時に、運動会の計画を目ざして、さまざまな活

動の展開が、頭の中に、いっぱいにつまってしまう先生方。

二期期は、園の方針、幼児の思い、先生の思い、しばしば大きな違いを含んで開始されます。

昔から、秋を讚美する詩や歌は、あとをたちません。空は青く、高く、秋の花は、春の花にくらべて、キリリッ、シャンと咲き、大人も子どもも、さわやかさを皮膚に感じ、大地を踏む足も力強い。このようなキリリッとした秋の自然界が、年間のカリキュラムの中で、運動会として、一つのアクセントを添えたのでしようか。

二期期開始と同時に、教師は運動会の準備に入ります。そして、先生は子どもと違う秋を身にいっぱい感じてしまいがちです。

子どもは、春よりも澄んでひびく、お友だちの笑い声から、話し声から、足音から、敏感に、秋を吸い、かぎ、感じとっているのではないのでしょうか。「あれー、赤とんぼがとんできた」「え、

どこに」じっとしていられなくて外へとび出る子どもたち。「先生、〇〇ちゃんが、お家に帰りたいって泣いているよ」と知らせにくる子ども。玄関口で、おかあさんの手にしっかりとつかまっ  
て泣いている子ども。四月の入園時にもどってしまったかと心配される落ち着かない環境の中で、早くも、子どもたちを集めて、運動会の練習に入る大人の秋は、何と幼児とは遠い秋でしょう。

二学期が始まり、三週間たらずで、「うちの園は運動会はもう終わりました」と聞き、しかも、年少児の出場も数多くあることを知って、驚いたこともありました。多くの園が、十月早々から運動会が開かれるために、どっしりとした保育の場となり得ないうちに子どもたちは、運動会の練習を重ねます。子どもたちは十分に、園生活をとりもどし、友だち関係にも落ち着きを見せて、教師もまた、子どもと一緒に「子どもの秋」を感じる時を持った  
めには、十月なかばぐらいまで、ゆったりと、落ち着いた保育を  
持ちたいものです。秋の自然界が、あんなに両手をひろげて幼児を誘っているではありませんか。

## 二、運動会までの過程

社会的な行事に合わせて、運動会の日程を決めますと、日ごろの保育の延長どころか、子どもに対して過重な負担をかけること

になったり、保育者にも、心身の負担がかかり過ぎることになったり、運動会の意義・目的がどこにあるのかを考えてみなければ、果して、運動会を実施する意義があるかどうか、批判の対象となることもしばしばあるのではないのでしょうか。

そこで去年、実施した運動会の過程の中の一つを書いてみたいと思います。

去年は、運動会を十一月七日に行ないました。十月なかばまで、日、一日と色づいてくる秋の色の中で、環境を整えました。十月に入ると、「昨日、兄、姉の学校の運動会に行つて、自分も参加した」と、大喜びで語る子ども、また父の会社の運動会にも家族揃って行き、日ごろ見なれない父の運動ぶりは、子どもにとって珍しいでき事であり、驚きでもあったのか、運動会の絵を画いたりして、あっち、こっち運動会熱が、会話の中からほとばしりました。

## 三、音楽・リズム

現職研究会の席で、運動会プログラムについて話し合いが展開されたことがあります。話題の中で、ときどき、「インディアン  
の踊り」というレコードの名前がありましたので、さっそくにそのレコードを求めました。その曲想は、原始的なリズムで、身体

の中に眠っている遠い先祖の血が目をさますような音色です。いろいろ検討の結果、運動会に用いることにいたしました。

まず本屋さんに出かけ、インディアンの資料を見ましたが、全然ありません。旅行会社に行き、パンフレット、ガイドブック、写真集等も見ましたが、観光用写真が多く、インディアンの生活の実体を知らせる本物の写真はついになく、仕方なく、それらを求めて、各クラスの机の上に、あちこち置いておきました。子どもたちは、写真の本に群がり、何か話しながら見ておりました。が、やがて口に手のひらをあてて、ウワ、ウワ、ウアと奇声を上げ、ピョン、ピョンと、とび上がり、手を上、下にして踊り始めました。三歳児もつられて、ピョン、ピョン、教師はインディアン酋長の次に偉い人にされ、見物席に案内されました。翌日から、「テレビにインディアンが出てきたよ。」「インディアン、うそ、いわない」などインディアン遊びが始まりました。羽根のかんむりをつくり、腰に紐をずらりとぶら下げて、口に手をあてては、奇声を発しています。インディアンの民話を話すと、こちらが吸い込まれるように聞いています。こんな状態が一週間ほどつづきました。

二週間に、レコード（インディアンの踊り）をながしておきました。序曲に、インディアンの、ボンボコ、ボンボコ、と響く

太鼓の音、次にインディアンの踊りのメロディー、これらが三回繰り返されます。一面の半分位から、突然ギャロップ、最後に静かな「さよなら」の歌とメロディーが流れて終わります。

おもしろいことに、子どもたちは、レコードを聞くと、あんなにも活動的に動き、はね、踊り狂ったのに、まったく手も足も出ないようです。教師は「好きなように踊っていいのよ」と一生懸命誘っていますが、子どもは好きなようにといわれても、何をどうしてよいのかとまどっています。太鼓の音だけでは何か原始的人間にかえったように、リズム的に身体を動かしては床をボンボコとたたいているのです。

運動会の目標は、九月の末ごろに「参加と協力」と定め、幼児、教師、母も参加し、協力して身体を活動させる中に、共に創造した喜びをかもし出す運動会と定めました。

「インディアンの踊り」には、教師も参加して子どもとの協力の場を設定しました。教師はさっそくインディアン踊りの練習に取りくみましたが、まるで国籍不明のインディアンが、日本の盆踊りをしているような仕末です。つたない演技と技術を、子どもの前にさらすことのないように、何をなすべきか話し合いました。

そこで創作舞踊のT先生に、子どもたちの教師に指導をしてい

ただこうかと話が進んでしまいましたが、指導を受けることは、子どもたちが、T先生のまねをし、子ども自身の創作のさまたげにならないかという心配が残りました。そこで、現職研究会の音楽の専門家、S先生におたずねしました。

S先生は「初めはまねでも、子どもたち自身が、音楽、リズムを身体にしみこませていくうちに、子どもは、まねをしている気分にはならず、自分のものとして、創作に入っていくので、まねがまねにならず大丈夫です」と助言をいただきました。

そこで、さっそくT先生をお招きし、手ほどきをお願いしました。太鼓のリズムに合わせて、躍動するT先生、子どもも、教師も汗だくになって「インディアンの踊り」を楽しみました。S先生がおっしゃる通り、子どもたちは、初めは、T先生のまねから入りましたが、しだいに、顔つき、動きが、何か原始的人間のようになり、リズムが五官に通じて、曲を楽しんでいる感じが、部屋いっぱいに広がり、調和と楽しいふん囲気が、かおりのようにただよっているのには、驚きと感激を味わいました。

T先生が園を去る時に、また、一つのハプニングが起こったのです。日本語のわからないアメリカ人の子どもが、色黒のT先生をインディアンと思いきみ、園の門を出て、T先生の後を追いかけて、礼儀正しく、しかも真剣な態度で「インディアンさん、あり

がとう。さようなら」といった時には驚きましたが、その時のT先生のインディアンの返礼にも感激しました。

運動会当日は、秋も大分深まってきましたが、予想されたほどの寒さではなく、まだまだ活動すると汗ばむ気候で、天高く、秋空のもとで運動会が開かれました。教師も、輪の中に入って、インディアンになり、子どもも、教師も、ひとりひとり、思い思いのインディアンの踊りを一生懸命に、その場で創作しながら踊りました。ひとりひとり、その演技と技術はつたなくとも、参加し、協力して楽しいふん囲気が生まれたことは、形にしばらくは、それぞれが生きた運動会であったと感じました。

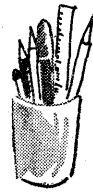
三歳児も、年長組の踊りには、地面の太鼓をたたき、番がくると輪の中に入って、とんだり、すわったり、手をふったり、自由な表現を楽しみました。最後に静かな「さよなら」の曲で終了した時には、暖かい、そして力強い拍手がわき上がりました。

#### 四、反省

運動会への積極的な理解が未熟な時に、園のプログラムのみが先走るのは、この辺で反省したいと思う。形の上でどんなに整っていても、ひとりひとりが生きた運動会とはいえないと、反省をいたしました。

(霊南坂幼稚園)

## 私の保育



堤 真紀子

### 一、はじめに

潮風の中で、まるで鮮魚のようにピチピチ育った子どもたちを連れ、威勢のよい声が親から、また祖父母から私に伝わります。

「先生、私とこの子頼みますわな」

「おっちゃくいで先生えらいと思うけど、まあみとうくんな」

「先生様、よろしく願います」

幼児の家庭が漁業であり、その内ほとんどが大阪へ魚商（ブローカー）に出かけるといった松阪地区でも特殊な職業を持つ家庭の多い、小学校併設の港幼稚園へ、昨年の春私は独立園から転勤になりました。昨年九月から三年保育が実施され、私はその年長組三十五名を担任することになりました。

### 二、漁業の町の幼児と

初めての出会いを私はひとりひとりの幼児を抱いてあげること

から始めました。「H君は元気そうな顔色ね。いつも外で遊ぶからかな」「M子ちゃんは、ニコニコしているのね。何かうれしいことがあるのかな」「A君は、ずいぶん重いね」等と話をしながらひとりひとりの幼児を抱きあげていきました。初めて出会った私に、幼児は全くてれることもなく、また恥ずかしがらずに次から次へと抱かれてくるのです。「漁場の子どもたちは人なつっこいのかしら」そう思いながら、ひとりひとりの幼児の顔を見詰めていくと、驚いたことに、多くの幼児の顔があまり清潔とは言えないのです。

「K君は、朝、顔を洗ってくるの?」「洗わへん」と恥ずかしそうな返事。「Y君はどう?」「洗わへん」私は、困った顔をし、「ハンサムな顔がだいなしやね」と言いながら、K君のタオルを濡らしてふいてあげることになりました。Y男は、「ぼく、今から洗ってくるな」と手洗いの方へかけて行きました。幼児たちに洗顔を習慣はついてないらしいようです。きつと歯磨きもできてない



のではと思ひ、齒が痛そうな顔をしているA子に「Aちゃんは、ご飯を食べた後、齒を磨いてくるの？」と尋ねてみました。「うちは、齒を磨くもんないんや」「あら、困ったね。Aちゃんは小遣いもらうでしょ。その小遣いをためて買ったらどうか。齒を磨くこと、大切なことだものね」そう言いながら私はさっそくA子の連絡ノートへ「齒が痛いと言っている幼児が多くいます。Aちゃんも時々痛そうにしています。もし時間がありましたら、齒科医へ連れて行ってあげて下さい。それからもう一つお願いしたいことがあります。齒を磨く用具がないと聞きました。虫齒をなくす予防にもなりますので、できればおうちで用意していただきたいと思ひます。幼稚園でも今、園で使用する齒磨きを準備しているところですよ」と書いて、A子に「今日、おうちへ帰ったら、お母さんに見せておいてね」とノートを渡し、返事を待ちました。翌日、A子にさっそく、「お母さんお手紙みてくれた？」と尋ねてみたのです。「わたしは知らん、お母ちゃん夜遅いもん」という返事。他の幼児の連絡ノートにも返事が書いてなかったり、また、「見ました」という印がしてないのです。朝の四時、五時ごろから起き、貝を売りにでかける親、また大阪へ魚を売りに出かける親たち。夜は夜で、魚が売れるまで帰宅しないため、幼児が床についたころ、帰ってくる親が多く、これでは、

いくら連絡ノートへ手紙を書いても両親たちは仕事の疲れで、ノートに目をとおす時間もないのだからと思ひ、私は園へ送り迎えに来てくれる祖父母に話をすることにしましたのです。

「連絡ノートにも書いたんですが、Aちゃんに齒磨きの用具をAちゃんの小遣いで買っていただけませんか」とおばあさんに話しをしたところ、「先生、すみません。嫁が働きに行つともんで、この子ははつたらかしてな。私も年をとつともんで、幼稚園のことはわからんし。小遣いだけは、この子が不自由せんだけおいてありますで、さっそく買いますわ」そう言つて帰つて行きました。翌日、A子は「先生、齒を磨くもの二つ買ってもらうに。それで私、齒磨いてきたよ。これみて、きれいになったやろ」と得意げに私に話してくれました。「きれいな齒になったね。ちょっと鏡を見てこようか」といつて鏡のところへA子を連れて行きながら、A子の祖母は、ハブラシを二本も買ってA子に与えたというのを私はどう考えればいいのかしら、ただ単に、余分に買ったのだからと思えばすむことなのでしょうが、私には何だかこのことが氣になったのです。

### 三、親の気持ちを知つてから

園にいるものであれば、それがお金で買ってすむことであるな

ら、必要以上に多く買うといったこの祖母の気持ちの中には、きっと、お金を用意すれば、教育はなされていくのであらうと、思ったのではないでしようか。家庭教育にしろ、どのように子どもをしつけ育てていけば立派な人間になっていくてくれるのだろうか。祖父母、親たちは、漁師町の中で子どもころから働き続け、教育よりお金儲けのほうが大切であるといった考えで育てられてきたのです。近海漁業で生計をたててきた親たちは、ただ働くことだけが唯一の生活であったのです。

現在、海岸地帯に工場が建ちならび、汚染された海では、魚もとれなくなり、海での仕事ができなくなってきた今、漁業だけではやっていけない。小、中学校だけの学力では、これからは充分といえないのではないか。外へ働きに行くにはやっぱり学歴が大切なんだという経済変動とともに親の教育に対する考えも変わってきたのです。しかし、だからどうしたらいいのだろうか、子どもを立派に育てるには、やっぱりお金がある。お金さえ出したらあとは学校に任せればいいじゃないか。私は、教育のことはわからないので、と言って親は働きに出るのです。

このように、大阪近辺へ魚商に出る多くの家庭では、子どもを生後百日目から祖母に預けたり、叔母に世話をしてもらったりしているのです。子どもたちは充分両親の愛情に浸ることもなく育

ってきているのではないでしようか。

かわいい小さな手の爪が長くのび、家では切ってもらってないのでしょ。大阪で買ってきてもらった流行の先端をいくような洋服を着ているにもかかわらず、爪は長くのび、その爪にマニキュアを塗っている幼児。私は日向で、ひとりひとりの幼児の爪を切りながら、この幼児たちに清潔な快い気持ちを知らせてあげることの大切さを感じました。「お母さんに切ってきてもらって」ということは、この幼稚園では通用しないのです。

#### 四、保育者として私の努力したこと

私はこの幼児たちをひとりひとりひざの上のせ、くしで髪の毛をとかし、爪を切り、スモックのはずれているボタンを糸でとめながら、この幼児たちに少しでもお母さんのかわりになってあげよう、そして、家庭的なふん囲気のあるクラスにしたいと努力しました。でも反面、二年保育を担当し、このように家庭的ふん囲気ばかりで保育がなりたっていくのかしら？ それにプラスやはり年長組五歳児としての発達にあった教育をしなければならないのではないか。そう考えながらも、現場へ出て四年目の私としては二年保育年長をはじめ担任したのですが、一年間の教育過程が全くつかめず、いったいどうすればいいのかしらと悩みの多

い毎日が続きました。幼児たちも、家庭に帰れば昼間父母はいず、一日平均三〇〇円位、多い子どもでは五〇〇円の小遣いが遊んでくれるといった状態の中で、園へ何かを求め、期待してやってくるのです。でも、幼稚園は家より楽しいはずであるのに、私の環境設定のまずさからか、幼児たちは、何をすることも遊びが長続きせず、廊下をむやみに走りまわったり、水道の水を友だちにひっかけて喜ぶ幼児が多く、なかなか幼児自身から遊びをつくりだしていくことがないといった状態で、毎日どうしたらいいのか困ってしまいました。

このような中で、絵本を読んでもらうことを大変好み、「お仕事をしたいからお部屋へ入って来て」と言ってもなかなか入ってこない幼児たちでも、絵本をひらきだすと、われ先にと、私のそばへ集まってきました。その時の幼児の目はランランと輝き、とっでもすばらしい顔つきになります。私はそのような時、絵本の中でも、物語的な絵本ばかりにかたよらず、やっぱりしつけに関するストーリーの内容を選んだりし、少しでも幼児の生活の中で身につけてくれるものが多いことを願うのです。

おもちゃは、ふんだんに与えられ、壊したらすぐ買ってもらえる。なくしたら、さがさなくてもすぐ新しいのが買ってもらえるといった家庭の中で、親は、わずかな休みの日はおもちゃを買

に、少し離れた市街地へ連れて行く、また仕事の帰りに新しい服を買ってきたりして、すぐに愛情をお金でかえてしまうようにみうけられ、親はどのように愛情を表現すればいいのかわからないでいるのではないかと思えます。

多くの家庭にある親子一緒に入浴して過ごす子どもにとって楽しい時間も、漁業という連帯感が必要な職業柄、公衆浴場があって、大人同士の社交場となり、親子の触れあいを持つことが生活の中で少ないのです。そこで少しでも親子の触れあいを多く持つてほしいと考え、土・日曜日の休みを利用して、絵本の貸出しを始めました。幼児たちは、絵本の貸し出し日を毎日楽しみに待ち園へやって来るのです。毎日貸してあげたいとは思いますが、親のいない時は読んでもらえないだろうし、また仕事の忙しさから「自分で読んだときな」と言われるにちがいないだろうと、週一回だけ貸し出しをしました。幼稚園では初めて絵本と出会った幼児たち、その絵本には幼児たちの求めている何かがあったのではないのでしょうか。親に読んでもらえるといった中で、親が自分のために時間をつくってくれることが幼児にとって何よりもすばらしいものであったのではないのでしょうか。稼いだお金で立派な家を建ててもらっても、「汚すから外で遊んどいな」と言われる幼児。そこには、全く幼児の生活はないと言いたいです。

## 五、わかってきた幼児たち

こうして少しずつ幼児の生活にある問題がわかりかけてきた私は、もっと幼稚園で安定して遊んでほしい、家庭でできないことを充分経験してほしいと思いました。「先生、遊んで」「先生のそばが好き」と教師のそばにいたいだけで満足している幼児、また、反対に、いくら私のそばへ呼びとめようとしてもすぐ外へ出ていって、固定遊具で次から次へと遊びをかえていったり、大ころのように走りまわって、その中では、身体にあたったとか遊具をとりあう「げんか」がくりかえされるだけだったのです。このような幼児たちに対し、何とか安定した活動が続き、幼児らしい人間関係が生まれるようなクラスにしたいと思案の末、先輩の先生に相談ののっていただき、保育室の出入口を一つにしてみました。

出入口のうしろをしめ、前から出入りをすることにしたので、最初は「うしろの戸、あかん」という幼児もいたのですが、「これからは、先生のいるそばの戸から出入りしてね」と約束し、クラス全体でまとまった活動をする時は幼児が勝手に外へ出て行くことを禁じました。教師が出入口のそばにいるせいか、幼児たちが部屋へ出入りするのが静かになり、やがて部屋の中の騒

がしきも少しずつ少なくなってきました。運動会が過ぎたころには、外へ出て行く時、教師と目と目があえば幼児はニコリ笑って出て行くことができるようになり、部屋の中は窮屈だ、外へはやく出て行きたいというような気持ちで、まるで逃げだしていくような幼児もなくなっていました。何だか落ち着いて、スムーズにクラスへの出入ができるようになったのです。それまでは、朝教師と顔をあわせてからあと、いつの間に出ていってしまったのかしら、どこで遊んでいるのかしら、といった幼児もいたのですが、そのようなこともなくなったのです。このことはただ単に、出入口を一つにしたという教師の試みが原因であると言いきるのは早計で、教師を中心にしたクラスの人間関係が育ったのではないかと先輩の先生は言われたのですが、私としては、自分が試みにやったことが成功したことを、うれしく思いました。

## 六、幼児の喜んだこと

このようにかわってきたクラスのふん囲気の中で、私は幼児たちにドッジボールをしない？とさそいました。活動的な遊びが好き、特に走ることが大好きな幼児たち。運動会の行進はうまくできなくても、かけ足になると、とってもきれいにみんながそろってできるんです。テレビ等から生活に音楽はあっても、それはす

べて幼児のリズムではないためか、音楽にあわせて歩くのはきらいました。「歩きたくない」といっても、かけ足の曲を聞くととびあがって走りだすのです。こんな幼児たちですから、ドッチボールと聞いて大喜び、男、女にわかれて始めたのです。「先生は、女の子の組にはいんな」と男児の元気のよい声、絵本を読んでもらっている時と同じ位、皆いきいきとしているんです。

「ボールがあたったら外へ出るのよ。ボールはなるべくお友だちの足へあてようね」とあそびの約束を決め、始めました。

今まで、まるで目的のないような遊びをしていたような幼児たちとは全く違い、魚がピチピチはねているようです。今の幼児たちの発達にあった遊びなのかもしれません、でもそれ以上に私は、保育室の出入口を一つにしたことで幼児たちのクラス意識が高まり、友だちとの気持ちの通じあいができたからじゃないかしらと思いたいです。安定した気持ちで遊ぶことができたのではないのでしょうか。「女の子は先生ばかりにくっついてるので、あてられやんわ、もっと離れなさい」と男児の声、私はうれしくて幼児と一緒に遊んだのです。

このほかに、幼児たちの喜ぶものに給食があります。毎日、給食を楽しみに幼稚園へやってくる幼児。一学期は一日おきに、二学期からは毎日給食をしています。「今日は給食あるの？」朝、

教師と顔をあわせるとまず第一声が給食のことなのです。「今日はプリンがあるんやて兄ちゃん言っとったわ」小学生の兄に給食の献立を読んでもらって園へやって来たK也。朝早く親が働きにかけるため、兄にラーメンを作ってもらい、登園してきたのです。だから給食が大好きでたまらないのです。トイレへ行っって手を洗い忘れることのあるKちゃんも、給食の時は忘れずに石けんで手を洗うのです。「食事の前には手を洗おうね」。「すんだあとには必ず歯をみがいてね」という約束だけはどの幼児も実行してくれるのです。家庭ではほしいしつけを園が代って指導しているのです。給食のエプロンを私があると、どの幼児も「お母ちゃん、お母ちゃん」と、しがみついてくるのです。

鮮度の新しい魚を市場に出さねばならない両親たちが仕事に早く出るため、朝からうどん、ラーメンという食事らしい食事をしてこない幼児には、お昼の給食がまちどおしいのです。

現在、給食について、冷凍食品をつかうからまずいとか、給食は何のためにするのか、家庭の味がないなど多くの問題が出されていますが、この幼児たちをみると、そのような問題は消えてしまふのです。はやくおかわりがほしくて、おかずをかきこむ幼児、お皿をペロッとねぶっている幼児、この満足げな表情で食べている幼児をみると、食事のエチケットとして禁止しなければ



ならない言葉も消えて、ただ「はずかしいわよ」と言うことだけで精一杯なのです。

このように幼稚園では一番満足な時間である食事の時は、幼児たちは普段より話題が豊富になってきます。気分が落ち着き安定するのでしょう。「口にたくさんものをいれてはお話しないでね」とだけ言って私はこの幼児たちの話を一生懸命聞きました。ここでは幼児たちは自分を思いきり出してくれるのです。「ホルモンが大好きやわ」とか「チーズは食べたことないできらいや」母ちゃん、今、病気で休んだるんやんな、そやけど今日は迎えに来るて言っとったわ」等々。幼児たちの口からいろんなことがポンポンととびだすのです。給食の手伝いが大好きな幼児たち。「明日はぼくの番や」「机をふくよ」次から次へと給食の配膳、片付けを手伝ってくれる幼児、家庭では自分の仕事の役割りなどないのでしょうか、幼稚園でのお手伝いがしたくてたまらないのです。私はいつもお手伝いの人にお礼をいうのですが、「どういたしまして」というおもしろい返事が心よくかえってきて驚いたこともありました。

このように幼児たちは、親たちと共に過ごす時間が皆無と違っていいほどですが、精一杯すくすくと育っていています。私は幼児たちがこのような環境の中で、たくましく育ってほしい

いと願いながら、幼児とともに、失敗をくりかえし、くりかえし、一年間を過ごしてきました。せめても基本的な生活習慣だけでも身につけてくれるよう努力してきました。時には幼児たちに裏切られながらも、私は幼児と一緒にやって来たつもりです。今、一年生に送った幼児たちをみると私はうれしくて、なぜか「ありがとう」と言いたくなる思いでいっぱいです。

## 七、おわりに

私は今まで漁場の子だから「荒っぽい」「どもならん（乱暴）」という言葉が当然のように思っておりましたが、一年間がすぎた今、どの幼児もみんな同じだと言えるようになりました。ただいたいなのは、教師は自分の持っている保育内容を幼児の生活に送りこんで、それができるか、できないか、喜ばないかどうか、ということでみてはいけないということが、一年たった今、少しわかったように思っています。このことを私は常に頭におき、これからも、保育にあたっていききたいと思えます。

(松阪市立港幼稚園)

「白い木馬」より

ブッ  
シュ  
・孝  
子

秋

山里にきて

久しぶりに秋とめぐりあった

ごめんごめん

こんなところでひっそりと

お前はもう幾年も空しく私を待っていたんだね

一九七三・九・一一

人生

私はまだ若かった頃には

今年の一月二十七日に、二十八歳の短

い生涯を終えられたブッシュ(服部)孝子さんの詩集、「白い木馬」が出版されます。多分、この雑誌が届きますところには皆さんのお目にふれていると思います。

著者、ブッシュ孝子さんはお茶の水女子大学家政学部児童学科を卒業後大学院に進まれ、その後大学院生としてドイツに留学され、その時に出会ったヨハネス・ブッシュさんと結ばれました。日本人とドイツ人ということなどをこえた人間としてお互いに心から理解し合っている結びつきであったということは、この結婚が決してすんなりと運んだものではなく、殊に孝子さんの乳がんという病やまいを知った上でのものであったということも、この詩集を読まれた方は深い感動をもつて感じとられると思います。

たまたまこの詩集のこと、ブッシュ・孝子さんのことが新聞で報道され、よくあることながら、それがもとで少々大げ

自分の好きな人生を歩めるものと思っていた  
意志と努力とその上にほんのちよっぴり才能があれば  
運など向こうからとびこんでくるさ

あれから

長い時が流れて今の私は考えている

そんな人生が歩めるのは

ほんのわずかの幸福な人達と

ほんのわずかのおろか者達だと

みんなが歩みたくない人生を歩いている

それでも一生涯命歩いている

一九七三・九・一〇

さにジャーナリストティックにそれからそれへと伝えられました。孝子さんが生前心から尊敬し、「先生がこの世にいらっしやるから生きていられる」とまでいわれた周郷先生は、「孝子さんをジャーナリズムの犠牲にしたくない！この詩集の本当の意義はもっともっと深いところにある、それを少しでもわかつてほしい」とおっしゃいました。

それで、縁もこくなつた五月末、ちょうど去年の同じころに孝子さんがヨハネスさんと一緒に訪ねられたという、秦野市渋沢の周郷先生のお宅へ、孝子さんのお母さんにいらしていただいて、先生と話していただきました。

山は春から夏へと移り変わる時で、杉木立の間の道はひんやりと冷たく暗く、その道をどんどん上って、大分行って、急に明るく開けたところがありました。アカシヤの切株があちこちにあつて、その根元からまた新しいアカシヤの枝が伸

# ブッシュ・孝子さんを偲ぶ

《対談》  
周郷博  
服部和子

## 孝子さんの詩

S 幼児教育とか、教育とかいったものの基本にあるのは、人間とは、何かという問題ですけれどね。そういうふう to 考えると、孝子さんの詩は、本物だから、…そして独特のものだから、それを考えさせるものをたくさん含んでいると思いますね。

H 私はむずかしいことはわかりませんが、先ごろ日本にきましたサイモンと

ガーファントルのサイモンが、(彼が作詩作曲しているわけですね)

「ぼくは詩人ではない、しかし本当のことをいった時に、それが詩になるのではないだろうか」

といった言葉をきいて、ああ、まさしく孝子も、…詩人ではないけれど、本当に自分の心を感じたことと思つたことをしゃべった時に、皆さまがそれを詩として認めてくださったんじゃないかな、という気がします。

びていました。

「ああ、ここだ、ここでヨハネスさんと孝子さんと、たきぎを集めてご飯をたいてたべたんだ。あの時、孝子さんはとてもいい顔をしてました」と先生はお母さんに話され、お母さんは静かにそのあたりを見ていらっしやいました。また歩き出すと、木苺の美しいオレンジ色の実がありました。「これは孝子の大好物でした」とお母さんがいわれて先生も私も口に入れました。そのほか、この詩集の装いでいを引きうけて下さった掘文子さんが、やはりここへいらして、先生と一緒に同じ山道を歩かれたとか、「その時に初めていろいろな草の名前を覚えてもらった。あの人は本当によく草の名前を知ってる人だ」と先生は、今度は私たちに「とうだい草」「破れ傘」など、珍しい名前を教えてくださいました。

それから先生のお宅へ帰って、お二人に話し合っていたできました。

S ぼくも孝子さんの詩を考えるとね、日本の詩人たち、白秋でも八十でも……言葉の魔術師ですね。戦後は、言葉の手工師、かな。それはまあ、いろいろな形になるものです。言葉というものの *logic* は……。そりゃまあずーっと深く

入って行くと哲学になるんだけど。そうじゃなくて、浅いところで言葉の手工師みたいなことをやってる人が多いです。そこへいくと、孝子さんの詩は違っています。そしてヨーロッパ社会のセンスも感じていますからね。日本の、花鳥風月、風景、というのと違うんです。聖書の言葉、あれも詩なんです。詩も、哲学、論理なんです。

孝子さんが初めにいっている、  
“すなおな言葉で、本当のことだけを語りたい。”

H それに彼女は、いわゆる書きたい

とか、書かねばならぬということではないに、書かなくては行かない、みたいなものからできましたから、非常に気は楽でした。それに発表する気もありませんでしたし……。

“私は少し変なんじゃないかしら、のんびるる薬のせいで異常に興奮状態になったんじゃないかしら”なんて、最初詩が出てきたころは自分でもいつてました。

S 詩を書こう、なんていうんじゃないか、よく教会なんかでいいますね。聖霊にとらえられた……”とか……神はこっちがつかまえるものじゃなくて向う、つかまえてくれるものだ、なんていうでしょう？ そういうふうにつかまっちゃったわけです。いやでも、責任を果たさなきゃならない、突然それがくるわけです。詩を書きたい。詩にあこがれてたっていうわけじゃない professional な詩人

(日本にもいますけれど) とは無関係な

んです。詩という本当の言葉が出てきたんです。

それで最初のころ孝子さんは、その気持ち、自分は変わっちゃったんじゃないか……自分でも不思議で、そういう詩も書いてるわけです。

H 出てきたものが詩かどうか……初めは自覚がなかったようですね。

S しかし、だんだん自覚して、“これは詩なんだな”と思うでしょう？ そうすると“詩とはなんだろう”と同時に考えていかなきゃいけないのでした……。

さっきの“すなおな言葉で……”という詩に戻りますが、詩がどんどんわき出してきます。考えたんじゃないか、詩を、特殊な生命力だとすれば、生命っていうのは一つの *form* 形をもつわけですから、その形ができてくるわけです。できてくるっていうのを、ほっといたただのモードで終わらせないで、“言葉にしてくれ”

と、いつてでてくるんです。その興奮を自分で抑えているわけです。

この二行なんかも、ちょっと読んで、それだけで終われば何でもないことだけれど、これはほくら全体が反省すべきことなんです。自分の情性や我欲を切つて、はらいおとして、すなおな言葉で本当のことだけを語るようにならないと日本は危険ですよ。

そして自分が変わってきたんで、"私"っていうのは何者だ"と自分に問いかけている詩もあります。"私に"という詩ですが、自分というものが九月九日から明らかに変わってきているんです。

「お前はいつたい何者なのか？」

「お前の中に何がおこった」

「お前の中に何が宿った」

と不思議な自分に問いかけ

「何がお前をそんなにいらだたせているのか？」

これは、わき出してきた一種の興奮、ちょっと言葉が悪い……非常に重要な……重要なでもないや言葉だけれど……

非常にすぐれた、ほんとのものに出会ってゐるんですね。それをやらなきゃいけない……心のいらだちをえがいた詩です。

そういうふうに、私っていうものは、きびしき、病気などというものさえも超越してゐる状態になって自分を見てゐるわけです。

詩人という名で通つてゐる人より本当の詩人、驚くべき詩人なんです。

ぼくは本当は、自費出版で、ゆっくりと、本当にわかる人の中に、物事の考え方、人間の革命を、人類が生き残るために必要な革命がおこるように、静かに滲透していくことを願つてゐたんです。

H 彼女自身は本当にまだ、自分の詩がどの程度かなどということとはわからず、とも角、あの子は周郷先生に認めて

いただくことが、すなわち生きる自分の支えになつてゐたわけです。ですから先生がご推せん下さつて、しかも本になる

ということが、あの子がまだこの世の中で、何か自分がしなければならぬことがあるから、という精神的な支えだったのです。それがあの子の中に燃えていた時に、病魔との戦いに少しでもプラスになるのではないかと生きてゐる内に自分の詩集を手にして、それが次のまた生きる力になれば……と思ひました。

### 孝子さんというひと

H あの子は何ていうか、非常に傷つきやすい子でした。普通だったら、あんなに傷つかないと思ふんですけれども、その点は、非常に弱かつたんじゃないかと思ひます。

中学のころ、掃除当番をしていてちょっとした過ちでガラスをこわしてしまつ

たんだそうです。誰ということなしに……。それで、みんなで先生のところへ謝りにいこうということになって職員室へ行ったらいいんです。そして孝子はもうただ、謝る……姿勢をしていたところが、お友だちの一人、男の方が、「こういうわけでガラスがこわれました。いくら弁償したらいいでしょうか」っていったんだそうです。それが、非常に、ショックだったんですね。家へ帰ってきてひどいしよげ方で、「お母さん、そういうもんじゃありませんか？ やっぱりごめんなきいって最初にいわなくちゃいけないんじゃない？」っていうことを涙をいっばいためて、私に話す。そういう子なんです。

そして、いつもひとの心みたいなものを求めていたと、私は思います。

モーツァルトが五歳の時に作曲した曲があるって、ある作曲家が書いてたんで

すけど、……そのモーツァルトは、自分の家へお客がくると、「あなたはほくのこを好きですか」ってきいたそうです。

お客が「もちろん好きだよ」っていう

と、モーツァルトは「ほんとに？ ほんとに？」

って目に涙をうかべてうれしそ

うにした少年で「その少年の本当の気持ちが出てるのがこの曲なんですよ。そ

れで私はこの曲がたまらなく好きなんです」と説明しながらピアノの宮沢明

子さんが演奏なさったのをテレビで拝見

したことがあります。そして、もちろん

モーツァルトの才能の面ではなしに、気

持ちの面で、同じようにうちの孝子が本

当にいつも何かを求め、求めて、そして

傷ついていたんだなと思いました。

それが大学へ入って、周郷先生との出

会いで、一気に、あの子の人生がそこか

ら始まったんじゃないか、と思うようにな

ったんです。私も両親があの子に生

命を与えたのだとしたら、あの子に人間

としての本当の精神をふきこんで下さったのは周郷先生じゃないかと、子どもが

育っていく時に、出会いということが、

いかに一人の人間にとって大切かという

ことをしみじみ感じております。もちろ

ん、求めていなければこの出会いはないか

ったかもしれないませんが、本当に幸せな子

だったと思います。

S 前にもちょっとお母さんからきい

たことがあります、今改めてお母さん

からきくとぼくにとってはなお驚くよう

なことがありますね。ぼくは、孝子さん

がそういうふうに変ったということを

知らないで（ちょっと言葉が足りないん

ですが）今度はフランクフルトへ行っ

た孝子さんに会った時なんか、ぼくの方

が反対にめがさめて生き返るような影響

をうけるわけです。

教育っていうのはね、人間が人間に与

える影響みたいなものは、いいものを与えた時も、与えた人はわからないんです。その逆に、悪いことも知らない内に与えているんです。人の成長して行く命をこわしていることもあるのです。それをいろいろへ理くつをいって、私は教育をしたなんていっちゃだめです。それよりも違うんですね。

H 私はいつも思うんですけれど、子どもってというのは生まれた時から胸の中に何本かのろうそくをもっていて、それに火をつけられる人が世の中には何人かいる。その人との出会いによって、できるだけはなやかにその心のろうそくに火がともったら、その人間は一番豊かに過ごせるんじゃないかって……。ですから、いくら親がつけようと思っても、親ではつけられないろうそくみたいなものが心の中にあるんじゃないかって思っていますね。その点孝子は、二十八歳の生涯

でしたが、私なんかよりもよっぽどろうそくの火もともったし、親として、心から喜んでおります。

S 私は今でもヨーロッパで会った時の、孝子さんのキラキラした太陽のような瞳を思い出しますが、ヨーロッパへ行って、ぼくなんかがとでもできなかったような出会いを、また孝子さんはしたわけです。そういうことを考えると、本当はこの詩集をいいものにして出して、「弁償すればいいでしょ」ということを心から悲しむ、そういう気持ち、それがずっと伝わっていくように……と願うんです。

H あの子は本当に、小さい時から飼っていた金魚が死んだりと、普通ちょっと泣く子はいくらもおりますけれどその悲しみ方が本当に、どうかしたのじゃないかと思うくらいに、さめざめと泣くんです。そうすると、ある程度までは

大人っていうのは理解するんですけれど、あんまりめそめそしてるとかえって、「いつまでもそんなこと」なんてとがめだてするようになるんですね。それで、私なんかも反省するんですけれど、ああいう子っていうのは、もっと強くなりなきゃなんていう大人の勝手な考えで傷つけてたんじゃないかと思うんです。子どもってというのは、ひとりひとり気持ちが違っているものなんですから、かわいそうなことをしたんじゃないかって今になって思っております。本当に傷みや辛い子だったんだなあって。

S それが本当の「人間」じゃないんですか？

今のように科学が進み、社会は管理社会みたいになって、自然破壊、公害……こういうところへきたら、こういう人が地球の未来を破壊から救う心の所有者なんじゃないか、と思いますね。



## ヨハネスさんとの結婚

### —お母さんとの出会い

**H** 実は、先生がヨーロッパから帰られてお電話を下さいましたところに、そろそろ日本へ帰ってきたらという話がちあがっております。ところが、孝子は、ちょうどそのころヨハネスとめぐり会ったわけです。それでどうしてもと彼と理解し合うためにも留学をのばしたいとってきておりまして、結局私が主人を説得したような形でそれが叶ったわけです。そしてその時先生が、

「孝子さんはきつと、ドイツにいても、何かをつかんでくる人ですよ。だからドイツの生活を続けさせて上げて下さい」とおっしゃったその言葉が私の迷いをたち切ってくれたわけです。そして、

「お前がどうしてもそれをしたいのなら、もう少しそこにおいてそれをしてきな

さい。心ゆくまで彼との交際（それもお前の重要な人生なのだから）とももちろん学問も重要なことだからつづけてきなさい。私はお前を援助します」

といてやりました。そして、そのあとの彼との交際、ウィーンの森を歩き、話し合い、そういう中で彼とのことをにつめていったと思うんです。

**S** 去年、二人で訪ねてくれて山へ行った時も、結婚というものは非常に重大なものだといっていましたよ、いいかげんじゃない……。

その時ヨハネスのお母さんの話もききましたけれど、とてもそのお母さんと気が合っていたんですね。そしてこの結婚についても孝子さんは、普通の人が考えないようなことまで深く考えたと思います。

**H** その、留学をのばしたことによつ

て、彼のご家族との交際も深まったようですし、何よりもお母さまが、非常に孝子をかわいがって下さって、結婚する時点においては、どちらかといえはヨハネスよりお母さまとの結びつきの方が強かったのではないかと思うくらいです。

**S** そして、結婚した翌年の一月二十七日にそのお母さんががんでなくなり、その二年後の一月二十七日に孝子さんもなくなったわけです。

**H** 孝子が日本へ帰ってきてから、本当にお母さまはよく手紙を下さって……孝子はいつも「お母さんは、いい手紙を下さるのよ」といって私にもところどころ訳してくれました。とてもユーモアがあつて愛情にあふれていて「もう一度私のこの腕にあなたを抱きしめたい」と結んでありました。

**S** そう、ジャーナリズムがドイツ青年とがんで死んだ日本女性の愛の記録、

なんていいますけれど、そんなものじゃないですね。むしろお母さんとの出会い、ふれあい、ですよね。

H そうなんです。そしてヨハネス自身も、孝子を通して、改めてお母さんを見直してらんです。この指輪はヨハネスのお母さまのおかたみとして孝子のところに送ってきたもので、お母さまがいつもはめていらしたものだそうなんです。そうしましたらヨハネスが、「母がもし生きていたら、とんできてきみを看病するだろうに」っていついてるっていうことを孝子からきかされました。それで私は、「それじゃあ、この指輪を私のはめて、こっちはヨハネスのお母さまの手、こっちは私の手ということにして看病するから元気になって」っていうことで私がお母さまの手です。でも、そのかきもなく孝子がなくなりましたので、ヨハネスにこの指輪は返しますって申したら、彼が

「お母さんは死ぬまで私のお母さんでいてほしいから、ずっとはめていてください」っていついて私にくれたものなんです。

S この詩の中にも「私のドイツのお母さん」という詩がありますけれど、そういうお母さんとの深い出会い、そしてお母さんが死に、孝子さんが死に、今度はヨハネスにとってはこの孝子さんのお母さんが「本当のお母さん」なんです。

こういうところが、今の日本の社会にはもうないような、深い、神秘的ものをもっている「愛」なんです。

H 本当に私にとっても今は、彼が生きがいなんです。私はドイツ語ができませんし、彼がローマ字でいいといってくれますもので、「元気ですか、からだに気をつけてください。何でもたべてください」それだけの手紙なんですけれど彼は喜ぶんですよ。この間も母の日に、「今、

お母さんは一人だから、ぼくの愛の全部をあなたにあげたいです」っていうローマ字の手紙がきました。

S 孝子さんがなくなつて、二日か三日目でしたかね、三人で話したとき、ヨハネスはお母さんの手を握っていいましたね。

「あんまり心配しちゃだめです。からだを悪くするから、私のお母さん」そして「孝子は私にとって聖人でした」って日本語でいいましたね。今までの話のような背景があつて初めてこの言葉がでてきたわけですね。それだけの意味があるんです。

### おわりに

S お母さんはつくづくいいましたね。生きてる長さじゃないんだって……ぼくも本当にそう思いますよ。そこへ行くのと、ちょっとぼくなんか生きすぎたな。

H 私もこの二十八年間を省みて、私もあの子によって、孝子がああいう娘で

なかったら私はこういう人生を送れなかつたんじゃないかっていう面がたぐさんあります。私はあの子に何もしてやらなかつたんですけれど、あの子の方から、

あの子が本当に何かしたいと思う時に私が何か、あの子の気持ちを通すような役目をたまたましたものですから、その点非常に感謝していたらしいということをおと

あとでお友だちからききました。しかし私はあの子から、あの子の書いてくれた手紙で広い世界を知り、心の世界までも広くしてもらいましたし、幸せだったと思います。ただあの子自身が、もう少し生きていたかったらと思うとふびんで……。

S しかし、ああいう詩を、なくなる三ヵ月前ごろから書き出したわけですけど、本当に「愛」が生きている、死に

上に生きていくということを感じますね。

最後に「出会い」ということをもう一度考えたいと思います。

お母さんというものは、子どもを生んだらそれでもういいっていうもんじゃありませんね。やっぱり第三者が中へ入るか、仲介するかということで母と子も出会わなきゃいけないんです。今は生んだだけで出会ってないんです。

H そうです。そしてそれが長ければなおいいですね。彼女が死んでつくづく感じましたのは、先生をはじめ、いろいろな方が彼女の心の中に何かを与えて下さっているんです。ヨハネスはもちろん、お友だち、ドイツで知り合った方々……彼女はこの世にもういないのに、いる以上に私に何かを残して、くれていったんだなあと思います。もし、生命というものが本当にあるんだしたら、こういう

ことをいうのじゃないだろうかという感じがします。

S 本当にそうです。今の日本では、一緒に住んでいても出会いがないんじゃないでしょうか。こういう性質の出会いが日本人にもっと広くおこってくれるように、この詩集が役に立つようにと心から思います。いわゆる、皆が詩といっているものと違う詩ですからね。多分ドイツもその内に出て向こうでも評判になると思います。そういうふうに見える、島国的な狭い世界でなく、ヨーロッパも含めた世界の中の日本という心が生まれてくることを、この機会に孝子さんとも望みたいと思います。

(一九七四・五・三〇)

## 日々に感じることに、思うこと

田中 都 慈 子

### 社会の渦

「暇がないというのは、理由にならない。暇は、自分でつくり出すものだからである」とどこかで読んだが、読んだ当時は、そういうものかな、と思っていたが、現在では、実際に大変むずかしい、無理なような気がするのである。仕事が忙しいというばかりでなく、なにか、この社会全体が、止めることのできない渦の中にすっぽりと入ってしまったような感じがしてならない。日の豊かさ、とか重味、といったものは、どこへ消えてしまったのだろう。世紀末の現象なのだろうか。

なにか落ちついてしようと思っても、いつもせかれているような、じっくり構えることができない気持ちをもつのは、私だけなのだろうか。今日考えたことをまとめようなどと思ってもすく明日になってしまうというふうなのである。この状態からぬけ

出そうと思ってもぬけ出せない世の中。心の余裕、のんきさが失われたため、人の考えが、他の人を出しぬぐとか、人を踏みつけても先を歩こうという傾向になってくるのではないだろうか。

「個性を大切に」といいながら、主体性のない社会で、結局は、みんなが同じになろうとしている。すぐれたものがあっても、渦にまきこまれて、消えてしまう。残念なことに、今の日本の状態では、天才は生れないことだろう。つぶされてしまうのである。教育制度もまた、それを邪魔している。

### 学校のあり方

現在の学校は、崩壊の一途をたどっているように思われる。なぜなら、教師・先生に対する尊敬や畏敬の念というものが、まったく失われてしまっているからである。生徒との間が、平等になりすぎたというのだろうか。「話し合いの場」をもつことは、も

もちろん重要なことだが、そこには、やはり、先を歩いた、教える立場にある人に対する礼儀があるはずである。また教師の側でも、それだけの権威と、すぐれた力を示すべきである。そして、すぐれた能力をもつ者を見だし、それを助け、保護し、自分よりすぐれた者にすべく、努力すべきである。それがなければ、優秀な人物は育たないし、社会全体が、落ちていくのである。

日本の今の状態では、文盲がいまいかわりに、みんな中庸をいく人物ばかりを育てている。そのため、学校を出て、社会に出て、競争ばかりで、いつもせり合って、お互いに疲れ果てている有様である。それがまた、忙しい社会を生み出していく。教師もまた、研究し、深い知識をもち、惜しみなく教える態度をもつべきである。

大学の講義を聴講しに行つて驚いたことは、学生が、先生の入口から、しかも、遅刻して入つてきて、おじぎ一つせず、堂々と一番前の席にすわるのである。本人は、平気で音をたててノートを出している。もっと驚くべきことは、誰もそれにびっくりすることなく、先生も気になさらず（？）講義を続けていらしたことだ。どうなっているのだろう。驚くこと自体、考えが古いのであろうか。

## 現場教師の再教育の場

特に幼稚園・保育園の教師は、現場に出て働いていると、雑務やら準備に追われて、ただ形だけ研究会に出席するということがなにかねない。忙しい職場——とくに肉体労働のため、疲れてお茶を飲んだり、雑談をしたりしているうちに、時間がどんどん過ぎていき、帰りが遅くなるということになる。もっと要領よく仕事がはかどらないものかと思ひながら、毎日を送るのが実態である。

たえず変化する幼い子どもたちを扱い、もっといいやり方はないだろうかと思ひ、たくさん具体例をもっているのに、それを考えたり、まとめたり、調べたりする時間がいつもほしいと思ふ。順番にでも、一年位の勉強・研究する時間を与えられて、再び学生の身分となるシステムは、夢なのだろうか。それが、実現できれば、教師にも意欲がわき、新しい考えが、毎日の保育の中に生きてくるのではないだろうか。

## 親と子ども

この数年、日曜日に電車に乗ると、必ず、子どもたちがカバンをもって元気なく乗っているのに出会う。塾に通っているのでは

る。帰ってくるころは、電車のはしからはしまで渡り歩き、人  
ぶつかりながら、連結の間の戸も閉めずに、友だちとぞろぞろと  
歩いていく。どうしてこんなにみんな、休みの日や、学校の後  
に、塾に通わなければならないのだろう。「がんばってね」とい  
って母親は、ニコニコして子どもを送り出し、当の本人は、いや  
いやながら出かけていく。学校で十分教えてもらえないのだろう  
か。どうしても補充しないといけないほど、勉強がむずか  
しいのだろうか。幼稚園に入るための予備校(?)もあるそうで  
ある。

学校に全部まかせるといいながらも、家庭教師を頼む。すべて  
人まかせ。そして学校にも、親にも不信任が増していく。なんと  
姑息的なことだろう。

雑草の繁ったあき地で、鬼ごっこや、ボール投げをし、夕食に  
どろんこになって帰り、あわてて宿題をしても、別に困らなかつ  
た時代もあったのに。

## 環境

そして現在、庭もつぶして敷地いっぱい建った家、ごみごみ  
した道路。どんな細い道にも車が入ってくる。雑草もアスファル  
トの割れ目から、こっそりとはえ、夏になっても、あのむせかえ

るような草いきれは、都会では感じられなくなった。おたまじゃ  
くしも、かえるも、かぶと虫やばったまでも、デパートで買う世  
の中である。

「昔はよかった」と老人のいうようにいつてばかりもいられない  
が、こうも自然が、だんだんと失われ、空気のよごれがひどくな  
ると、そうもいいなくなる。

休み時間にクローバーの花で冠を編んだり、校庭に生えている  
木いちごやくわの実を、こっそり食べたことなど、話をしても信  
じてもらえなくなることだろう。

電車のドアが開くと、人の間をかきのけて、「ねえ、おかさ  
ん、とったよ、とったよ」といいながら、あいた空席のまん中に  
両手で左右をたたいている子ども。ゆうゆうと後からきて、「お  
ばあちゃんはこちら、○○ちゃんは、そっちょ」といってすわる母  
親、なんともはやである。

なにか一つ心棒がぬけている。それでいて回転が速い。しっか  
りとかまって生きていかなければ、ふり落とされそうな世の中。  
それが、今の社会のような気がする。どこをどうすれば、もう少  
しゆっくりできるのだろうか。まわりの景色をみながら、のんびり  
と、ばかんと何も考えずにこの社会という車に乗っている  
られないものだろうか。

(暁星学園幼稚園)

Parents in Modern America

by Le Masters

The Dorsey Press 1974 Revised Edition



江波 諄 子

私のアメリカでの恩師、ハリス教授から、先週一冊の本が届きました。「現代アメリカの親たち」と題する二百ページ余りの本で、大変よく書かれているという評がそえてありました。一九七〇年に初版され、今年の一月に改訂版として再版されたものです。今回は皆様と共にこの一冊の本のページをめくってみることにいたしました。

この本は、現代のアメリカの親の問題を中心に社会学的なアプローチをしたもので、あくまでも心理学的、精神病的な見方をしたものではありません。

親であることのむずかしさは、実際に子どもを育てたことのある人でなければわからないかもしれませんが、脳に近いコンピュータを考え出した有名な数学者の Norbert Wiener も、一言、親であることの神秘さと複雑さをもたらしていることを聞きますと、また、どうして女性は学校ではベテランのすばらしい教師に成り得ても、家庭では愚かな母親になってしまうのだろうかという疑問を投げかけられますと、あらためてそのむずかしさを感じ入るようになります。

著者はまず第一章で、Kingsley Davis (1940) がアメリカの親の問題としてあげた十一の特徴や局面を紹介して

ます。それらを要約してあげますと、(本全体を通して項目別に問題点を番号をうって羅列しているのが、いかにもアメリカ人らしいのですが)

1、社会の変化の割合が激しいほど、親は子どもとの間に問題を多くもち、ゆっくり変化する社会の方が世代のギャップが少ない。

2、子どもの発達が急激に大きく変化している時に、親のそれは減少していたりする。(たとえば、性への関心など)

3、身体的、心理的な結合が、親と子ども間で異なる。

4、大人は現実主義であるのに対して、子どもは理想主義である。

5、親の一方的な権威は、子どもに人生のただひとつの面のみを触れさせることになるので、賢い親は子どもへの権威をできるだけ制限する。しかし一方、子どもが大人になるまで、子どもの全生活の責任をとらねばならない。

6、道徳とか、よい行いとは何か、の内容が世代間でも世代内でも異なる。

7、親のみならず、学校、マスコミ、仲間がそれぞれに子

どもに対して権威をもつ。

8、社会の法律や規則や組織によって、子どもとしての年齢規定が異なる。(日本でも児童とはの定義が場合ににより異なります)

9、核家族の中では、権威やそういうことに関する感覚が大家族制の中より拡散されないので、親と子どもの緊張感を生み出す。

10、親は子どもにどんな役割を教えてやればよいかかわからず、将来子どもがどんな社会に住むか理解しかねる。

11、性の緊張。

以上の十一を現代の親の問題として分析しています。この十一の中に、この書物の中でこれから追求していくポイントがほとんど出て来ていると考えてよいでしょう。

親であることのむずかしさを考える場合、いつの時代でもそうですが、殊に現代において大きな原因になっているものとして、急激な社会の変化があげられるでしょう。社会変化の中には、もちろん親であることの困難さを軽減してくれるプラスの面(たとえば、医薬の進歩、物質的に豊かになったこと、より進んだ避妊法など)もあります。それ以上に親をして役割をますますむずかしくさせること



になった社会の変化がたくさんあります。たとえば、現代の親は昔よりも、子どもや専門家や先生やソーシャルワーカーによって、また時には自分自身によってずうっと高い要求水準の中で親であることを望まれております。(昔は、自分以外の親仲間によってのみしか評価されませんでした)つまり、親であることの質的要求があがっているということでしょう。その上、昔の親は子どもを生理的、社会的によく育てることで、十分親としての役割を果たしたことになりますのに、今は親より、よりすぐれて子どもを育てるのがあたりまえのように考えられています。したがって、親が自分自身にとってネガティブ Negative な自己像をつくり出すこととなります。また、アメリカ社会には、子どもというものは、貴重なものとして考えられる一方、親や年寄りについては、消耗するものと考えたりして、価値を低くおく傾向があります。Negative な面はまだあります。家庭面の問題としては、親になる十分な準備もできていないままの若い親がふえ、家庭の主婦は、前よりずっと多く家庭外に役割をもつようになり、結婚生活に以前ほど永続性がなくなり、離婚率は毎年ふえる一方です。社会との関連でみますと、子どもの養育に関して、専門家と相

談することが多くなりましたが、実はその専門家の説く養育方法も十年ごとぐらいいに変わり、特に、科学的な人間行動の解釈の仕方は、実際のところそれほど親の役には立っておりません。しかも、一方ティーンエイジ世界といわれるような若者のグループや、マスメディアの広がりによって、子どもはその中で、自身のアイドルや音楽や着るものや言葉をもっており、親の監視の目は届かなくなる一方で、こうしたグループと触れ合うことさえ大変むずかしいのです。著者は、ある意味でアメリカの国自体がもはや田舎的な社会ではなくなってしまったといえます。それなのに昔農業に多くの人が従事していた時につくられた学校の制度(たとえば農繁期のための長い休暇など)が依然とあり都市化された社会に生きる親には時々苦痛にもなるといえます。

第二章以下、十二章までありますが、そのうちで私たちが身近に感じられる興味深い章は、四章(親であることの役割分析)、十章(親、マスメディア、若者のグループ)、十一章(親と社会変化)でしょう。それで、これらの章をさらにご紹介したいと思います。第一章で問題提起されたことがより細かく話されているようです。

第四章では親であることの役割分析として、十三に分けて話していますが、ここでは続けてまとめてみましょう。

現在の段階では、親としての役割はよく定義されていない中で、親は自分なりに親としての役割をそれぞれとっているわけですが、過去十年間に親の権威は減ったものの、責任のみは重くのしかかっています。親は不適當な行動科学的犠牲者で、たとえ専門家が失敗しても、親は成功するよう期待されますし、第一章でも述べられたように、親としての役割の要求水準がずうっと高くなっています。その上、当然のことながら、親は自分の子どもを（たとえ養子であっても）選ぶことはできません。これは昔とかわっておりませんが、親への要求が高いためたえば中産階級の親はその子どもの学力や能力にかかわりなく、少なくとも大学教育は受けさせ、卒業させることを社会的にも何となく期待されます。昔なら、学校に興味がなかったら、家や親戚の商売を手伝うとかして、親が子どもの職業についてかなり自由に介入し、方向づけることができましたが、今はそういうわけにはいきません。また、現在では働く母親がふえ、世の企業は彼女たちがいなかったら非常に困るのに、もしも彼女らの子どもに何かおこった場合に、社会は

それほど同情的ではありません。しかしながら、それでも仕事はどうしてもいやでしたら離れることができますが、親としての役目はこの世で退くことのできない少数の重要な役割のひとつです。親自身への高い要求、社会からの親として以外の別の役割要求、そうした中で現代家庭の親は従うべき古い伝統的な家庭の姿もなく、そしてそれに代わるべき新しい家庭のモデルもありません。見よう見まねで親であることの役割をとらうとしております。

次に、十章で述べられているマスメディアや若者たちのみのグループの動きは、現在の日本でも同様に私たちの大きな関心事のひとつです。著者は数字によって、いかに子どもがマスメディアの代表的なもの、テレビによって影響を受けているか示します。試みにご紹介しますと、アメリカには十八歳以下の子どもが七千万人いて、そのひとりひとりが高校卒業するまでにテレビを見る時間の平均総数は二万二千時間、それにくらべて学校で受ける授業は一万一千時間だそうです。暴力もののテレビ番組が多い中で、子どもは十四歳までに一万八千人もの人間が殺される場面を見ることになるかと報告しています。マスメディアによって、若者の価値観は大きく影響を受け、その特色はたとえば、

性や暴力についてゆるんだ考え方をし、未成熟なことを理想化したり、物質主義、快楽主義などとしてあらわされています。

もちろんテレビは、簡単には得られない貴重な知識を画面から与えてくれますが、子どもばかりでなく大人をも惑わせてしまうテレビの力にもう少し気づき、おしとどめる必要性を強く説いています。たとえば、テレビの画面上では、頻繁にタバコをふかしたり、お酒をのんでいる宣伝があり、また優雅な旅への誘いをいたします。しかし決して画面では誰も肺がんにはならないし、ビールをのんでも太らないし、旅にお金を使っても破産することはありません。このように画面の裏に潜む現実の問題を教えないままに、ただ商業ベースのつて若者をあおりたてるところに親として大いに憂うる点がマスメディアの中に潜んでいます。こうしたものの考え方を自分たちのみの世界にたやすくとり入れる若者に親は戸惑うばかりです。

最後に第十一章では、これまで何度も述べられてきた社会変化をさらに詳しく分析しております。その特質といいますが、概念規定を次のようにしています。

- 1、社会変化は、社会の進歩や悪化と同義でない。

2、社会変化の割合は常に一定していない。

3、社会変化は人々にとって一様でない。

4、社会変化はいつも計画だつて行われぬ。

5、社会変化によっておこる結果は、しばしば前もって予想されない。(たとえば、自動車の普及によって親は子

どものデイトの監視ができなくなった)

6、社会変化は、望まれてでなく無理やりにやってくる。

それうまく対処できる親とそうでない親がある。

7、社会変化が起こった後、前の状態にはもどれない。

(たとえば、離婚率は増える一方である)

その他、この書物の中では、社会階層の問題、人種的少数グループの問題、片親の問題、親とのカウンセリングなどを章としてとりあげています。

総じて現代の親であることの中にひそむさまざまなむずかしさの原因を分析し詳しく説明することに終わっているようです。しかしながら、その分析は大変鋭く、わかりやすく、身のまわりをふりかえるとどれもこれも納得のいく説明ばかりです。訳も分らず親であることのむずかしさに悩んでいた人々に、何かすっきりとした光を投げかけてくれるような一冊といえます。(十文字学園女子短期大学)

## 小鳥に寄せて

光 木 美 子

☆ 小鳥が私の肩に止まる

五月のある朝、登園してくる子どもを待っていた私は、ふっとげた箱の上に置いてある鳥籠に目が止まった。どうして今まで気がつかなかったのか不思議に思いつつ、三歳の女兒と一緒に、小鳥の水とえさをかえた。「小鳥の存在に気がつく」ということは、何の変哲も無いことだが、妙に私の心に止まった。その日の保育が終って、なぜかしらと思いをめぐらせていると、ほのぼのとひとつの印象深いできごとが、私の心の中によみがえってきた。

それは二年前、私が幼稚園で実習をしていたころだった。私は実習後、更衣室

でひとりお弁当を食べていた。するとガサと音がした。ドキッとして私はその音の方に目をやると……布袋から二羽の小鳥が顔を出し、見る見るうちに二羽とも袋の外に出た。「ああ」と私は驚きと恐怖の念におそわれた。(恥ずかしいことに、私はこの年になって、生き物に對し、どういう訳か恐れ的气质がまず先に立っていたのだ。)私は箸を動かすのをやめ、じっと小鳥に目をすえた。今こっちにとびかかってくるかもしれない。今のうちにそっと部屋を抜け出そうかな。臆病な私はそんなことを思いながら。すると突然、一羽の小鳥が羽ばたいたかと思うと、なんと私の肩に止まった

のである。一瞬息を飲むと、次に私の髪をくちばしでつつき始めたのである。心臓の鼓動は極限に達し、心も体も硬直状態。ところが不思議なことに、私は肩に小鳥が動くのを感じつつ、しだいに落ち着いてきた。小鳥への恐れが小鳥に伝わってはいけない。もし伝わったら小鳥の方が私から逃げていく。小鳥は少しも私を恐れていない。むしろ親しみさえ覚えている。それに比べて私は……私はすっかりさっきの緊張からとき放たれた。気がついてみると、私の肩の小鳥は、もう一羽の小鳥と、かわい声の掛け合いをしている。私の心はすっかりなごみ、とても心地よかった。この思いがけない体験をきっかけにして、私は小鳥のみならず、いろんな生き物が身近かに感じられるようになった。このように私の生き物に対する見方、感じ方(大げさに言えば世界観)を変えたできごとについて、考

えを整理してみる。

私が小鳥に対して恐れをいだいた瞬間、小鳥は私にとって、もう異なる存在相対する存在になっている。私は自分の心に壁を作り、小鳥との距離を大きく作ってしまっている。ところが小鳥は、私の思いをよそに、親しく私の肩に止まる。私との距離ははじめからゼロである。"向うからこちらにとびこんで来てくれる"この直截なふるまいに、私の心の壁は取り除かれたのである。この時、私は小鳥と共存する関係になっている。小鳥がいて、私がいて、小鳥と私が作る世界を共に生きている。小鳥は私を新しい次元の世界へ導いてくれた使者である。

☆ 遊びて私は小鳥に出会っている

エツの「わたしとあそんで」という絵本がある。生き物と遊ぼうとしてつまえようとしますが、みんなに逃げられて

しまった女の子が、ひとりでちくちくさぶきとぼしたり、池にしゃがんで黙って水すましを見ていると、さっきの生き物が女の子のそばに寄ってくる。女の子はみんなと遊んでいることに気づき、とてもうれしい体験をする。このお話と私の体験とは似ている。あえて言葉にする、心のわく、意図が取り除かれた時、動物も人間も相通ずる自然の本質（ありのままの世界）を体験することができる、といえよう。

このことは保育に通ずる事柄である。実際、私は子どもとの遊びにおいて、まさに小鳥にしばしば出会っている。次の例は、二年前の保育体験だが、今もなおその時の楽しい体験を鮮明に思い出すことができる。

五歳の女兒Yは、幼稚園になじめないようで、所在なさそうである。私は一緒に

に遊ぼうと思いつながら、この時までそのチャンスを選んでいた。

私はYと女兒が鉄棒をするのを見る。女兒たちは散らばって行く。女兒Eは、私の手をとる。するとYも私のもう一方の手をとる。(はじめて、私はYを身近に感じる) 三人で歩いて砂場にやってくる。私は砂を手でさわりながら、「さらさらだと高くないわね」と言う。

E 「お水かければいい」

私 「そうね」

Yは黙って立ち去ってしまった。(一瞬「やらないのかな」と思ったが、何だかまた戻って来るような気がした) 案の定Yは女兒Mと砂場にやってくる。(YはMと一緒にいると心が休まるようだ) 女兒三人と私は、水をかけては砂を盛り、山はしだいに高くなって行く。手が泥んこになる。

Y 「ぬれても洗えばいいもんね」と自

分に言いかけせるように言う。

私「そうよ、気持ちいいわ」と言う。

M「スコップ持ってくる」

Y「四つね」

穴を掘り始める。水もどんどん入る。

砂や水にまみれて、遊びはしだいに力動的になる。

私「いいこと考えた。ちょっといいもの捜してくる」

私は木の枝を拾って来て山にさす。もう一度取りに行こうとすると、Mも一緒に来る。砂場に戻ってみると、さっきの木枝に、女兒たちが草をつけている。

私「木に葉っぱがついた。きれい！」

男兒も女兒も数人砂場に来て、遊びに加わる。(おもしろさは他の子どもにも伝わる)ますます活動はダイナミックになる。砂場は海のようになり、泡もいっぱいである。

私は茶わんを持って来て泥をつめ、ひ

っくりかえしてその上にフワッと泡をのせる。

女兒「先生何？」

私「何だと思う？」

Yたち女兒三人もやり始める。私は大きなお盆を持って来る。女兒らはその上に泥をひっ繰り返す。くずれてはまたやりなおす。

Y「お友だちにあげたい」と私に耳うちする。(飛躍的な発言)

私「わーそれはいい」と大喜び。

女兒三人は「作りなおそう」と言って、新しく作り始める。(きつとおもしろいものができると期待して)私はその場を去る。

ただならぬ声にせかされて砂場に行ってみると、お盆いっぱい大きなまんじゅうができています。

私「へえ 大きい」と驚き感心する。

三人は満足そうに立っている。

(Yはこの遊びを境に、実に生き生きと活動するようになった。Yの世界がパッと開けたのである)

Yがはじめて私の手をとったことは、Yと私が新しい世界に入ろうとしていることを示す。そして、Yも友だちも保育者も一緒になって、砂と水と、とにかく遊びきったその全体験の中に、すべての秘密がひそんでいる。つまり、砂、水という無意識的物質が、それに向かう人間の心(無意識の心)を呼び覚まし、力動化させる。そこで遊ぶ子どもと保育者は共に、大地的共通基盤に立って、意識を越えた生き生きとした充滿の世界を体験することができるのである。

(お茶の水女子大学)

## 橋 詰 良 一 著

### 「家なき幼稚園」の主張と実際

より (七)

#### 保育項目の細説

私の「家なき幼稚園」という子どもの国の一日々々、すなわち園の子どもの生活がどんなに行われているか、どんなことが主なものになっているかを知りたいと思わるる方もあると思いますから極々の概説をさせていただきます。

歌えば踊る生活 歌えば必ず踊ったりはねたりするようになって、すなわち歌だけを上手に歌わせる練習をしたり、踊りだけを上手にさせるための教練をしたりはしない。ただ歌わせながらのすからの催しに促されての舞踊をさせます。それを楽しませます。そのために先生も踊れば、お当番の姉ちゃん母ちゃんにも踊っていただきます。

お話をする生活 お話を聞かせて喜ばせることはもちろんですが、子どもからもお話を聞きます。互いに話し合い、聞きあつて、共に楽しむ生活を営むのですが、話術というようなことを先生に望まず、どんな初任の人でもできる方法によって感情を交換

してもらいます。話されなければおとき話の書物や雑誌などを読んで……。

お遊びを共にする生活 協同のお遊戯をすることも大切な生活ですが、自由に選びあつたお友だちと自由なお遊びをさせることも大切なお遊戯です。大切な幼児生活です。その生活に供するための遊具は何でも自由に使わせません。

けれどもその取扱いは是非とも自分で運び出したら必ず自分で始末をさせます。

そしてこの自由生活のうちから、私が最初にいった「子ども同士の生活から得られる五つの要目」に触れさせたいと、祈るので、すなわち、自覚、自衛、自省、互助、互業です。

回遊にいそむ生活 回遊とは、前にもいった通りわが園の大切な体育項目で自然に親しむことも、自然を観察することも、すべてこの項目を通じての企望としてあります。回遊がいかにして行われるか的一端は後に添えてある日記の抄録からも想

像していただけたかと思いますが、『回遊』のうちに含まれている項目の

石つみ（川原や山地などでする自然創作で机の上の積木などに比すべきもの）

魚つり（取りにやらせるもので、モンテッソーリの感覚修練なものにも適したもの）

水遊び（夏季には特に自動車などで遠距離に送って実行しているもので、宝塚などは毎日の遊びになっている）

土掘り（これは粘土を掘って、その場で人形をつくりなどさせるものです）

草つみ（自然に親しむ教育項目のなかで、一番美しく、永久的なものです）

虫とり（動物を愛し、これを飼ってやるための遊びです、せみとり、とんぼとり、ちょうとりなど皆それで、特に声を聞いたりますます）

鳥の声を聞く（ひばりや、うぐいすなどの声を聞かせるようにする導きです）

あげていけば限りもないほどたくさん項目が抱擁されているこの回遊を、是非とも理解していただくために、後に、日記のと

ころどころを抄録して置きました。

手技を習う生活 折紙や、糸取や、板ならべや、切ぬきや、いろいろの手技を楽しませるのです。保母としての教育をうけた女性でなければとてもできないと考えられる点は此の項目にあるようですが、私はさようにまでむずかしいものとして眺めたくはありませんのです。

家庭めぐり 池田家なき幼稚園の幼児のお宅招待―園児のお宅から招待されて、その日、そのところを幼稚園にして巡って行きますことは各地とも家なき幼稚園の親しい特色として喜んでいくところですが、池田の父兄がたは特にこれを喜んで下さいます。おやしきの広いお宅や、山野に近いお宅からはたえずご招待をいただきます。

注（次にあげられた家庭名には最初に家なき幼稚園をご紹介下さった柳瀬先生宅のお名前がたびたび見られます）

#### 家なき幼稚園の一日

家なき幼稚園の一日、それがどうして暮らされているかを知っていただくために各園の実際にやった一日を、ところどころから抜き出して参考にいたしましょう。

#### ◇池田家なき幼稚園

礼拝（お宮様で）九時



お遊戯 九時十分—九時三十分

回遊 野原の広場へ十時—草花つみ、かくれんぼ

談話 十一時—十一時二十分

おべんとう 片付けて帰る仕度

帰園 一時

◇箕面家なき幼稚園

自由にお遊び 子どもがほほ揃うまで

朝のお唱歌及び遊戯 九時三十分—十時

回遊 (岸本様の別荘へ) 十時三十五分

お遊び 十時三十五分—十一時

お話 (親指小僧) 十一時—十一時十五分

お遊び 十一時十五分—十一時三十分

お弁当 十一時三十分—十二時

お遊び 十二時—十二時三十分

おうむやわしを訪れながらお帰り、十二時三十五分ごろから

ら帰途解散

◇大阪家なき幼稚園 (自動車)

〓 四班の中の一の組案の一日 〓

午前八時半 (第一集合所発の時間)

午前九時十分 (阿部野駟着)

この間の四十分から五十分までの自動車内の保育は種々あります。最も効果のあるのはお唱歌です。折り紙も簡単なものならできます。(速力が大変ゆっくりしているため、動揺が少ないです)

大阪の市中を毎日走っていても決してあかない子どもたちです。

日々新しいものを見つめます、聴きます。これらに退屈を感じ出した子どもは色紙を折ります。お唱歌を歌います。時には英語のおけいこもします。充実した時間です、こんなにして阿部野にま

いります。

阿部野橋発 午前九時三十分

矢田着 同 九時四十分

この間はただ窓の外を見て過ぎます。けれどもお客さんのほとんどない時は電車の内でもお遊戯を致します。変わった所で保育もまた思わぬ効果のあるものだと思います。本当に喜んで子どもたちは踊ります。けれども窓外の景色を見ているだけで充分の間です。時にはお客さんの方たちとおもしろく遊んでいただくともあります。矢田から園舎まで十分から十五分位がゆっくりした時間です。

午前十時 朝のあいさつ

午前十一時まで 今日のおけいこ

— 53 —

このおけいこは一週間のプラン通りやっています。けれども雨上りの美しいお天気の時等は特別にお花つみに変更することもございます。こんなにして都会にとじこめられている子どもたちにとつてのわずかの田園生活を意義あらしめるためにお家にいることはほとんどありません。お天気と相談の上予定もしばしば変えます。

午前十一時 昼食(約三十分)

午前十二時半まで 自由遊び

同 十二時三十五分 お帰り

同 十二時四十五分から五十分 矢田駅着

午後一時 阿部野着

同 一時五分 阿部野着

同 一時五十五分 最後の集合所着

次にご参考のために日記を抄録します。

◇恐ろしい日

茂子(箕面)

自然に恵まれた箕面の春はかほかと暖かいいお天気の続くこのごろを飛び出して行きたい行きたいという心をおさえつつ、毎日お部屋の中ばかりでおけい古をしている私たちや子どもら真黒のお部屋の中に閉じこめられているような気がします。恐ろしい犬：狂犬が飛び出したのです。私たちの第二のお部屋あの大自然

の広い広いお部屋の中に突進して行くことができないで大閉口、子どもたちをよるこぼすべく、スミレ、タンポポ、レンゲ草等きつとたくさん咲き揃って待っていてくれることでしよう。きれいな美しい花をつくって見せてくれる子どもたちの姿を思い出しただけでも、行かないのが残念です。恐ろしい犬!! 狂犬!!

今日このごろの箕面は犬を見ると神経過敏となっています。この不安な日が早く退くようにそして黄色く、赤く色どられた美しい草だたみの中で小鳥のようにとび回ることでできるのかな春の日の一日も早く来るように……と静かな心で祈りつつけましよう。

◇水撒き

治子(池田)

KちゃんYちゃんお手々にジョロをさげてうれしそう顔で参りました。小さいのや大きいの、それに中位の、幼稚園はみる間にジョロ屋さんになりました。ちゃんとそれぞれ木フダがついています。どの子も水まきは好きです。自分のジョロが気になるらしくそばを離れない子がたくさんあります。ちゃんとS君は手を取りました。なるべく使う時でなければいじらさないようにつとめねばならないと気がつきました。朝礼拝をすますとジョロの用い方を話してやりました。桶に水をせんぐりせんぐりくんで、それをすくうのです。

狩野さんのおばあさんは「まく場所を定めてやらねば」などと案じていられたがまあ今日はためしに、どんな工合かさせて見ましたら、安心々々、よくよくまきました、神主様の前まで。

きつとよろこびなざるでしょうと思いました。しまいには水の方に故障をおこしてきた砂やゴミがどっさり上がって来てもう使えません。幸いほとんどすんだのですからいいのですが……。

小村さんが昨年支那へ行かれたたくさん絵を書かれた内の、幼稚園を一枚持って来て下さいました。目のさめるほどきれいなを……説明など聞いて子どもたちはよろこびました。

#### ◇初夏の植物園

小澄（宝塚）

六月五日、グラランドの宝塚植物園に行きました。薄く曇って、このごろでの、いい回遊日和です。みんな久し振りのグラランド行きです。今日は皆仲よくお手々をつないで、喧嘩が一つもなかったようです。うれしく思いました。あの、歌劇場（新温泉の）に行く高い路をいつも通ります。両方の樹々が、このごろは若葉のトンネルです。そして、桜ん坊……青い梅の実……。回らない舌で。

『てんでえ、たくらんぼ、あるよ』と『ったり』あとこ、あとこ

（あそこ）ますい（丸い）のん、なってるわ』と、敬ちゃんと、

小ぢんな梅の実を見付けたりします。葉っぱのかげに、かくれん

坊をしているようなのですけれど、よく見付けては、そのたびに、いちいち立ち止まって、教えて呉れます。

音楽学校の前まで来ますと、今日は、きれいな、吹奏楽器の音もしていました。コーラス、ピアノ……いつも。そこは振り返り、振り返り通ります。

『……ね、きれいなお声……』と言いながら通り過ぎました。その、とうとう坂を下りると西宝線のガードです。そうしてトロツコのみちを植物園の方へ……。

温室の前を通る時は、ガラス越しに、赤、朱、紅、うす紫など……の花が緑の葉に交って、皆の視線をひきました。いつか、こわいお顔のおじさん（ここの植物園の会社の社長さんであったそうですが）が出ていらして、きれいなお花を、皆に下さったり、秋には、菊見をしたりしたところですよ。

## わらべうたの一考察

小林 っや江

— わらべうたとのてあい —

わたしが「わらべうた」にであい、「わらべうた」のすばらしさに感動したのは、今から四十五年前のことです。当時わたしが、東京高等師範（現東京教育大学）付属小学校につとめてまもない時でした。

わたしの職歴は、愛知県女子師範学校から、東京府立第六高等女学校へ、そして付属小学校、と教える人はだんだん小さくなっていきました。殊に小学校の低学年が中心でしたから、指導には心をつかいましたが思うようにできず、毎日、なやんでいました。朝から子どもたちは、元氣よくいろいろの遊びをたの

しくしていました。その中で、木かげや、運動場の片すみでうたいながらおもしろい遊びをしているのに気がつきました。

一人の子どもが桐の木につかまってしゃがむとあとから五、六人のお友だちがつかまってしゃがみます。リーダーがげんきよく

「竹の子一本おくれ」と取りにきます。一列になった子どもたちは「まだめがでないよ」と歌います。リーダーはそれをきいてすぐごかえります。またリーダーはげんきよく「竹の子二本おくれ」と歌いながらきます。

竹の子の子どもは「まだめがでないよ」とことわります。三回目には「竹の子三本おくれ」ときます。「竹の子」の子どもは「もうめがたよ」と歌います。

リーダーはうしろの子どもから「よいしょよいしょ」といって竹の子をぬいていきます。リーダーは一生懸命でぬこうとします。「竹の子」の子どもたちはぬかれまいとして力一ばい竹の子の親にしがみついています。そのすがたがとてもおもしろくしばらくみていました。ちょうど五月でしたので季節的にもよい遊びだったと思いました。

また片隅の方では、

「茶々つば茶つば」の手遊びや「すいすいすっころばし」の指遊びなどたのしく遊んでいました。

すこし大きな子どもは、

「なつも近づく八十八夜、トントン」と調子よく手合せ遊びもしていました。

わたしは毎日学校に行つて子どもたちのつきからつきへと発展していく遊びに興味をもつようになりました。

それ以前から「学校唱歌校門を出です」ということをよくきいていました。唱歌の時間に一生懸命教えた歌は、校庭ではきかれませんでした。その中で「茶つみ」はトントンという休符（トントン）のリズムにおもしろさを感じたのでしょうか誰でもすぐに歌いながら手合せができるので、よろこんで歌っていました。

学校唱歌も、なにか工夫し、遊びをつけて指導したならばよいの

でないかと気がつき、遊びを考えて指導してみました。歌に合わせて体をうごかしたり、手をたたいたり足拍子をいれたりして指導しているうちに、だんだん教室での生活も前よりは楽しくなってきました。これが「動きのリズム」になり「器楽合奏」に発展していくようになりました。しかしまだまだ考えていかなければならない分野がたくさんあると思いました。それではお話を前にもどして、

“どうして「わらべうた」が幼児や子どもたちによるこぼれるか”ということについて考えてみましょう。

#### わらべうたの特徴

●歌と遊びが一体になっている

●歌詞は大体一節（物語ふうのもの、教え歌などは例外）である

●音域はせまく、お話の音域が中心で（二、三度）時に上の方に下の方にひろがっている（四度、六度）

●リズムはかんたんで、つぎのようであります（58ページ）

●拍子は二拍子が多く、四拍子はそれについていますが、三拍子はごく少なく六拍子は二拍子型でうたわれているものがみられます

二拍子のリズム

イ) 2 

ロ) 2 

ハ) 2 

ニ) 2 

ホ) 2 

ヘ) 2 

ト) 2 

チ) 2 

四拍子のリズム

イ) 4 

ロ) 4 

ハ) 4 

ニ) 4 

ホ) 4 

ヘ) 4 

ト) 4 

チ) 4 

三拍子のリズム

イ) 3 

陽音階



陰音階 (上行)

(下行)



● 旋律は、日本語のアクセント

でお話しようなふしでつ

くられています。したがって

地方によってアクセントが違

うのは自然でありましょう

● 音階は日本音階の陽音階が多

く、ついで陰音階がつかわれ

ています

陽音階は上行・下行は同じ。

陰音階は上行・下行が●印のよ

うに違い、日本人のすきな音をし

らべてみますと「ドレファソ」だ

ということですが。

このような特徴をもっています

から、歌いながら遊ぶのはだれで

もでき、そのうえ、何回歌っても

つかれず、ますます興味がわい

て、つきからつきへと創作をする

ことができるので、たのしくいつ

までも歌いつづけられると思いま

す。学校唱歌のように正しく歌うことを要求される歌とはちが  
って、自由にそくばくなく歌うところに魅力があるのでしょう  
か。

そこで、みんなの好きなわらべうたをしらべてみました。

### ——子どもの遊んでいたわらべうた——

#### ・ 手遊び

おせんべいがやけた　　ずいずいずっころばし

ちやちやつばちやつば　　子どもと子ども

せっせっせ　　青山土手から

#### ・ 鬼遊び

おにごっこするもの　　かごめかごめ

ことしのぼたん　　あぶくたつた　　かくれんぼ

#### ・ 子とり遊び

たけのこ一本おくれ　　花一もんめ

#### ・ 輪遊び

ひらいた　　ひらいた

#### ・ 列遊び

いもむしごころ

・ なわとび遊び

おじょうさま　　大なみこなみ　　ゆうびんやさん

#### ・ 関所遊び

通りゃんせ

#### ・ まりつき遊び

あんたがたどこさ　　一番はじめは

#### ・ さようならの時

おみやげ三つ　　あはよしばよ　　かえるがなから

「子どもは遊びの天才」であるということがいわれていますが、  
つきからつきへと遊びが発展されていきます。

ドイツの大教育家で幼稚園の創設者のフレーベルはつぎのよう  
にっています。

「唱歌は、体の動き、すなわち遊戯をとまなうのが自然であつ  
て、むしろ両者を区別せず一体にすべきだ」とっています。

わらべうたはフレーベルの考え方をそのままうらづけしたもの  
だといえましょう。

学校唱歌にも遊びを取り入れて、もっともっと創造性を培うよ  
うになればよいのではないでしょうか。

### ——わらべうたの種類——

ついで、全国のわらべうたには、どんな種類があるだろうか、

そして地方によってどのようにかわった歌い方をしているかなどのべましょう。

・遊戯唄

- 手まりうた……………あんたがたどこさ (東京)  
お手玉うた……………おさらい (福井)  
羽子つきうた……………一人来な (東京)  
なわとびうた……………一羽の鳥 (宮城)  
かくれんぼ……………田にしゃ田にしゃ (岩手)  
物まね遊び……………らかんさん (静岡)  
輪遊び……………ひらいたひらいた (東京)  
関所遊び……………通りゃんせ (東京)  
子とり遊び……………花いちもんめ (秋田)  
鬼遊び……………かごめかごめ (千葉)  
物えらび遊び……………どっちかっち恵比寿 (青森)  
手合せ唄……………青山土手から (福島)  
指遊び……………ずいずいずっころぼし (東京)  
きつね遊び……………おっくんさん (愛知)
- ・子守唄
- 眠らせ唄……………坊やはよい子だ (東京)  
遊ばせ唄……………三丁長嶺 (岩手)

・天体気象の唄

- 風……………たこたこあがれ (埼玉)  
雨……………雨降んな (宮崎)  
夕焼……………山火事焼ける (静岡)  
月……………うさぎうさぎ (東京)  
寒気……………おおさむこさむ (東京)  
あられ……………あられやこんこん (秋田)  
雪……………上見れば (秋田)
- ・動物・植物の唄
- 雀……………雀ど雀ど (秋田)  
蛙……………びっきびっき (山形)  
かたつむり……………だいぼろつぼろ (茨城)  
ほたる……………ホーホーほたるこい (秋田)  
とび……………とんびとんび (秋田)  
とんぼ……………やもやもよ (山梨)  
からす……………からす勘三郎 (広島)  
かり……………かりわたれ (東京)  
つる……………つる つる (山口)  
つくし……………ずくぼんじょ (佐渡)  
蓮華草……………げんげつみも (京都)



桃……………えんやら桃の木 (埼玉)

・歳事唄

正月……………お正月がござった (東京)

七草……………七草なすな (愛知)

鳥追い……………その鳥アどこから (新潟)

左義長……………齋の神 (新潟)

彼岸……………田にしどん田にしどん (愛知)

盆……………盆ならさん (愛知)

亥子……………いの子 (広島)

〈注〉 地名名は大体その地方からのわらべうたで今では全国共

通に歌われているのが多いようです。東京地方が十曲、愛知

地方四曲、秋田地方六曲、二曲が岩手・静岡・埼玉・広島・

新潟の地方になっています。他は一曲ずつ。

——「かごめかごめ」について——

「かごめかごめ」は鬼遊びで、千葉地方(現、野田市)の唄で、

人当て鬼の唄であります。関東地方を中心に全国に分布していま

すので歌詞も曲節も大同小異であります。

古調はつぎのように歌っていました。

かごめかごめ

かごのなかの鳥は

いついつでやる

夜あけのぼんに

つるつるフッベキった

なべのなべのそこぬけ

そこぬいてたアもれ。

「かごめ」というのはもと身をかがめよの意。それが鷗(かも

め)の意に転用し、いつのまにか「籠の中の鳥」とつづけたよう

です。

千葉県の野田地方では

かごめかごめ

かごの中の鳥は

いついつ出やる

夜明けの晩に

鶴と亀とすッべった

「うしろの正面だアレ」

と歌っています。

地方によっては方言でいろいろな歌い方に変っているのをしら

べてみました。

「かごめかごめ」を

# かごめかごめ

♩ = 96

わらべうた

*p* *mp*

かごめかごめ かこのなかの とりは

*mf*

いろいろでやーる よあけの ばんに

つるとかめと すべった うしろのしょうめん だあれ

岩手地方……………「いついつではる」

愛知県三河地方……………「いて出てあそぶ」

岡山地方……………「いついつ出あう」

山口地方……………「いつもかつもおりやる」

「夜明けの晩に」夜明けのまだ暗い時分（あけぐれ）の意味で  
しょう。

愛知・対馬地方……………「夜明けの頃に、暁かけて、何とか告

ぐる」

長野地方……………「十日の晩に」

新潟地方……………「よあさの晩けつつらつら」

岡山地方……………「いつかの晩に、羽が生えたらペー

タ、足が生えたらチョコチョコ」

山口地方……………「四日の晩に」

徳島地方……………「やみ夜の晩に、杖ついてつっぱった」

「鶴と亀とすべった」

秋田地方……………「鶴と亀とすっぽんだ」

東京地方……………「つるつるつべった」

などと地方によっていろいろおもしろく歌われています。昭和二十八年二月十日文部省から発行された幼稚園のための指導書

「音楽リズム編」には、日本童謡、下総皖一伴奏でつぎのように

# かごめ

日本童謡  
下総皖一 伴奏

♩ = 96

かごめ かごめ かごのなかの とりは

いついつ でやる よあけの

うちに うしろのしょうめん だーれ

なっています。

かごめ かごめ

かごのなかのとりは

いついつ でやる

よあけの うちに

うしろのしょうめん だーれ

「うしろと亀とすべった」が略されて「よあけのうちに」となつて、すぐにうしろの正面だーれと歌い終っています。

昭和二十八年には日本童謡として文部省が出版されていますが、そのころ民間から検定唱歌がぞくぞくと編集されて世にでました。その時学校図書で小学校「おんがく」が出版されました二年の本の中につきのような「かごめ かごめ」がわらべうたとなつてでています。

「かごめ」 (日本童謡)

よあけのうちに

「かごめかごめ」 (わらべうた)

よあけのばんに

つるとかめとすべった

と歌詞が違っています。

——かごめかごめの遊び——

このわらべうたは、全国の子どもたちに歌われ遊ばれていることは前にもお話ししましたが、遊びはほとんど同じです。

準備：一列円陣で、一人のリーダーが円の中に入り、目をつむって、しゃがんでいます。

方法：円周の子どもは、互いに手をとって、歌いながら円周を歩き、「うしろの正面だあれ」の「れ」のときに、円心に向って、円周の子どもは、一斉にしゃがみます。このとき中のリーダーは、自分のうしろの人が誰であるかわかりません。あたったらその子どもとリーダーとがかわってくりかえしていくとも遊びつづけます。

昔の遊びの画を見ますと、三人組の中に一人目をつむってしゃがみ、あとの二人は手を合わせてぐるぐるまわっていますので、うしろの正面にきた子どもはすぐわかったと思います。

わらべうたという伝承環境は日本人の生活からしだいに忘れられようとしています。しかし地下水のように土地にしみこんでいますので、ちょっとほりさげると、こんこんと泉のようにわきでできます。そして子どもたちにもいつまでもいつまでも歌い遊ばれていくと思います。

(日本女子体育大学)

幼児の教育 第七十三巻 第九号

九月号 © 定価一七〇円

昭和四十九年八月二十五日印刷  
昭和四十九年九月 一 月発行

112 東京都文京区大塚二ノ一ノ一

お茶の水女子大学附属幼稚園内

編集兼 津 守 真  
発行者

112 東京都文京区大塚二ノ一ノ一

お茶の水女子大学附属幼稚園内

発行所 日本幼稚園協会

108 東京都港区三田五ノ一二ノ一

印刷所 図書印刷株式会社

101 東京都千代田区神田小川町三ノ一

発売所 株式会社 フレーベル館

振替口座東京一九六四〇番

◎本誌御購読についての御注文は発売所  
所フレーベル館にお願いいたします

のびのびと楽しいお絵かき

# 絵画用品



・キンダーニ入用画架

18,000円

水製で折りたたみ式

画板の大きさ60×60cm

110×170mm 筆用コップ

水入用コップ 画用紙とパレット

・ビニールエプロン  
(クリーム色) 220円

・キンダーカラースタンド  
4,500円

・絵筆 (大) 180円  
(小) 115円

・キンダーポスターカラー  
640円

・まんてんカラー 400円

国産の絵の具と8号の筆

・まんてんくれおん

12色 230円

16色 260円

20色 320円

・くれおんソフト

16色 260円

・まんてんはすてら

12色 260円

16色 320円

20色 380円

・キンダー版画セット

5,900円

・キンダーカラーペン

(10色セット) 720円

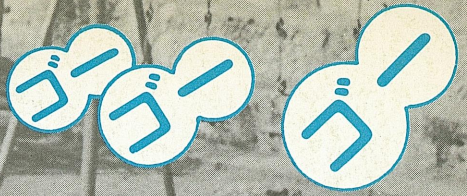
・キンダーカラーペーパーペン

(12色セット) 570円

フレール館

くわしくは、フレール館代理店・支社・支店・営業所、または本社営業課 (03)292-7781(代)にお問い合わせください。





# キンダー カート

定価16,000円

- 本格的なゴムタイヤ使用
- ボデー・鉄パイプ シート・ラワン合板
- ボデー・青 シート・黄緑  
ボデー・黄 シート・ 橙 の二種
- 全長70cm 全幅56cm 全高45cm
- 交通安全教育をはじめ、協調性・社会性を身につけさせる遊具として、ぜひおすすめいたします。

くわしくは、フレーベル館代理店・支社・支店・営業所・本社営業課 TEL 東京(03)292-7781(代)にお問い合わせください。

**フレーベル館**